

県営かんがい排水事業

関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ-1

—守山市山賀西遺跡—

1986

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

県営かんがい排水事業

関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ-1

—守山市山賀西遺跡—

1986

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

## 序

県下のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査はすでに13年目を迎え、ほ場整備事業の拡大に伴う発掘調査件数の増加によって種々の資料や成果が蓄積されております。

発掘調査で得られたその成果を公開し、広く埋蔵文化財に関する御理解を深めて頂く一助にしたいと、ここに昭和60年度に実施いたしました県営かんがい排水事業に伴う発掘調査の報告書を3分冊に分けて刊行するものであります。

最後に発掘調査にあたり、御協力頂きました地元関係者並びに関係諸機関に対し、厚く感謝の意を表すと共に報告書の刊行に御協力頂きました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

滋賀県教育委員会

教育長 南 光 雄

## 例 言

1. 本書は県営かんがい排水事業に伴う発掘調査報告書Ⅲ-1で、昭和60年度に発掘調査したものである。
2. 本調査は滋賀県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本書には、県営かんがい排水事業守山南部地区に伴う山賀西遺跡の調査報告をおさめた。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

### 滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原 浩
課長補佐	中正 輝彦
埋蔵文化財係長	林 博通
“ 技師	葛野 泰樹
管理係 主事	山本 徳樹

### (財)滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄
事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査三係長	大橋 信弥
“ 嘱託	岩間 信幸
総務課長	山下 弘
“ 主事	松木 暢弘
嘱託	中谷サカエ

7. 本書の執筆・編集は、調査担当者大橋を中心として岩間、調査員井浦由美が行い、

文章の末尾に執筆者名を付した。

8. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。
9. なお、本調査の対象地は、本書に収載した山賀西遺跡のほかに、山賀遺跡、杉江遺跡、杉江東遺跡も含むが、並行して実施した守山南部は場整備事業に伴う、支線用水路に伴う調査と重複する部分が多く『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』XⅢ-1に合せて収載することとし、同調査に伴う山賀西遺跡関連部分を本書に収載することとした。

## 目 次

序

例 言

1. はじめに .....	1
2. 位置と環境 .....	1
3. 調査の方法と経過 .....	3
4. 遺 構 .....	4
5. 出土遺物 .....	10
I 形態の分類 .....	10
II 土器類の観察について .....	14
III 出土土器の検討 .....	15
IV ま と め .....	17
山賀西遺跡出土遺物観察表 .....	22

## 挿 図 目 次

第 1 図 山賀西遺跡調査位置および周辺遺跡分布図 .....	2
第 2 図 調査区トレンチ配置図 .....	5
第 3 図 遺構平面図および断面図 .....	7

## 図 版 目 次

- 図版一 遺構 調査区T1～T3全景（東から） 調査区全景（北から）
- 図版二 遺構 T1遺構掘込状況（西から） T1・SK12遺物出土状況
- 図版三 遺構 T2・SD2遺物出土状況（南から）  
T2・SD2遺物出土状況（東から）
- 図版四 遺構 T2・SD2壺出土状況 T5遺構検出状況
- 図版五 遺構 T2遺構検出状況 T4遺構検出状況
- 図版六 遺構 T5-B遺構検出状況（北から）  
T5-C遺構検出状況（北から）
- 図版七 遺物
- 図版八 遺物 T1出土遺物 T出土遺物
- 図版九 遺物 T1出土遺物 T3出土遺物
- 図版十 遺物 T4出土遺物 T4出土遺物
- 図版十一 遺物 T4出土遺物 T2・T5出土遺物
- 図版十二 遺物実測図 1～6（T1-SD1） 7～11（T1-SD5）  
12～14（T1-SD6）
- 図版十三 遺物実測図 15～23（T1-SD6） 24～28（T1-SK9）
- 図版十四 遺物実測図 29（T1-SK17） 30～34（T1-不明）
- 図版十五 遺物実測図 35～37（T2-SD2）38～39（T3-ベース直上）  
40～44（T3-SD1）
- 図版十六 遺物実測図 45～46（T3-SD1） 47（T3-SD2）  
48～51（T3-SD3）52～53（T3-SD4）
- 図版十七 遺物実測図 54～72（T3-SD4）
- 図版十八 遺物実測図 73～89、92（T3-SD4）
- 図版十九 遺物実測図 90、91、93～106（T3-SD4）

- 图版二〇 遺物実測図 107~113 (T3-SD4)  
114~127 (T3-SD5) 128 (T3-SD7)
- 图版二一 遺物実測図 129~133 (T3-不明)  
134~147 (T4-SD1)
- 图版二二 遺物実測図 148~169 (T4-SD1)
- 图版二三 遺物実測図 170~185 (T4-SD1)
- 图版二四 遺物実測図 186~197 (T4-SD1)



## 1. はじめに

本報告は、県営一般かんがい排水事業守山南部地区に伴う山賀西遺跡の昭和60年度における発掘調査の成果を収めたものである。

山賀西遺跡は、昭和51年度に守山市教育委員会が実施した分布調査によって、その存在が明らかになり、昭和52年度に同市教委が実施した県営ほ場整備事業に伴う試掘調査によって、鎌倉時代に中心をおく集落跡であることが明らかになった。今回、かんがい排水事業に伴う用水路埋設工事が、当地に計画されたため、事前に発掘調査を実施することとした。

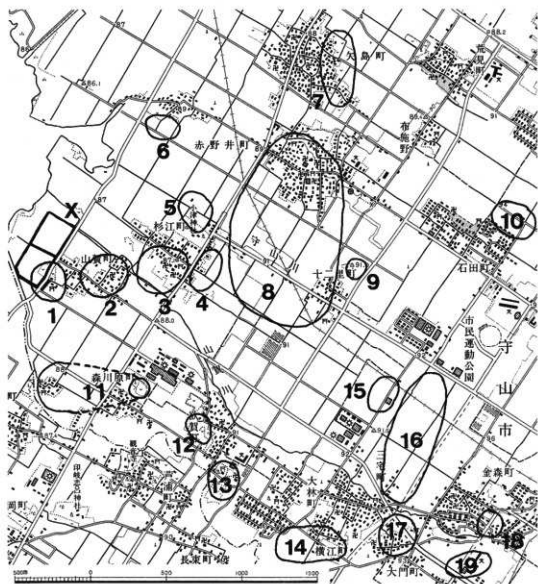
調査は財団法人滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財課調査三係長大橋信弥を担当者とし、同職託岩間信幸・氏丸隆広を現地主任に得て、昭和60年11月より、昭和61年2月まで現地調査を実施し、3月まで整理調査を実施した。

現地調査にあたっては、草津県事務所土地改良課、地元山賀町の協力を得たほか、梅村智弘・今井俊人・久野実・山原昭彦・福原英明・福知義久・横谷裕人・水谷哲郎の諸君が参加し、整理調査にあたっては、井浦由美・福井真理子・古川登・寿福滋（写真）の協力を得た。記して謝意を表したい。

(大橋・岩間)

## 2. 位置と環境

山賀西遺跡は守山市山賀町の現集落の西側に位置し、その分布範囲の中心は昭和51年度の試掘調査により畑地に限定される。本遺跡は同町を貫流する山賀川、南方の境川の形成する微高地上に立地する。北方の守山川を含めてこれらの旧野洲川の分流域においては、古代から中世におよぶ大集落群を現出させたことが近年の発掘調査の成果によりあきらかにされてきている。守山川流域北の赤野井遺跡で、弥生時代から平安時代の榎立柱建物跡（第1次調査で45棟）が多数検出され、圧倒される観があるが、守山川および境川の中流域にはいくつかの集落遺跡が群在する。なかでも古墳時代と中世に盛期をもつ横江遺跡では、溝で区画された中世集落の実態があきらかにされてきているが、守山川下流域での集落遺跡では、山賀・杉江・杉江北・杉江東遺跡



- |           |           |           |                   |
|-----------|-----------|-----------|-------------------|
| 1. 山賀西遺跡  | 2. 山賀遺跡   | 3. 杉江遺跡   | 4. 杉江東遺跡          |
| 5. 杉江北遺跡  | 6. 赤野井浜遺跡 | 7. 寺中遺跡   | 8. 赤野井遺跡          |
| 9. 狐塚遺跡   | 10. 石田遺跡  | 11. 森川原遺跡 | 12. 欲賀遺跡          |
| 13. 欲賀南遺跡 | 14. 横江遺跡  | 15. 三宅北遺跡 | 16. 金森西遺跡         |
| 17. 大門遺跡  | 18. 金森遺跡  | 19. 古高遺跡  | X 山賀西遺跡<br>(本調査区) |

第1図 山賀西遺跡・調査位置および周辺遺跡分布図

が知られるものの、面的にまとまった調査例が少なく、昭和59年より始まった新守山川改修工事に伴う杉江遺跡の調査経過に注目するのみである。山賀西遺跡においてもその中世集落遺跡としての性格を究明する本格的な調査は実施されておらず、今のところ狭長ながら対象面積の広い本調査例のつかさねによって当遺跡の全容の一端が徐々に解明されていくことに期待されよう。(岩間)

### 3. 調査の方法と経過

調査は、まず工事計画規模に基づき最小のトレンチ(幅1m×長さ2m)を設定し遺物・遺構の有無を確認する試掘方法をとることから始められ、遺構が認められない限り工事計画深度の約1mまでバックフォールにより掘削し、断面の土層堆積状況を記録した。遺構が確認された箇所では、遺構面が途切れるまでトレンチを延長させ、精査に入った。その結果、遺構が認められなかったグリットが56箇所、遺構の存在するトレンチが5箇所設定された。

山賀川の北方に沿う地点(T1・T2)で遺構が確認されたが、それ以北では、耕土下に暗灰色粘土および暗灰色泥質粘土が厚く堆積しており、同層中に若干の磨滅する遺物の小片を検出したが、遺構は認められなかった。G10~31では泥質粘土が耕土下約1m以下にさらに堆積するものと思われ、G37~56のラインにおいては無遺物層の青灰色粘土層が泥質粘土層下に耕土下約70~90cmで露呈する地点があるが(G37~39、G41・42・45)、それ以外は耕土下に暗灰色粘土および泥質粘土が1m以下まで厚く堆積する。遺構が確認されたT1・T2では耕土下約40~50cmで遺構面に達する。

山賀川以南の遺構の確認できなかった地点も同様に暗灰色粘土および泥質粘土層が厚く堆積するが、次下に青灰色粘層が耕土下約70~80cmで露呈する地点(G34・35、G1~4)がある。T3では耕土下約60~80cm、淡茶灰色粘土層下に遺構面が検出された。T4では南端で耕土下80cmで溝状遺構(SD1)が検出されたが、北方で耕土直下約20cmで遺構面に達し、そのベースである淡茶褐色粘質土はトレンチ中央部で消滅する。T5の地点は周囲の水田より約1m高い畑地で、耕土下80cmで遺構面に達した。この地点の工事深度は1.2mであったが、そのレベルアップによって遺構の破壊を免れたため掘込を行わず、プランの記録のみで埋戻した。(岩間)

## 4. 遺 構

本調査は支線用水路予定地点に設定された幅1mの狭長なトレンチ調査であり、検出された遺構の全形・性格についてあきらかにできないが、一応ここでは溝（SD）土壌（SK）、ピット（P）に分類して述べていく。

### T 1

山賀川北岸に平行する長さ約80mのトレンチ内に耕土下約40～50cmのレベルで溝7条、土壌21基、ピット4基の遺構面を検出した。基本層位はⅠ耕土（20cm）、Ⅱ淡灰色粘土（30cm）、Ⅲ黄灰色粘土（20～30cm）、Ⅳ青灰色粘土で、遺構はⅢ層の黄灰色粘土層を切り込んでおり、次の青灰色粘土層に達する深い遺構がある。

溝は7条ともトレンチを横断しており、深さ20cm程度のもの（SD1・SD3・SD4）と最深が50cm（SD2）と1mを超えるもの（SD5）がある。埋土層はみな暗灰色粘土層で、SD5については工事深度約1m下でも埋土の分層はできなかった。

土壌についてはその完全なプランが確認できたのが21基のうちSK14・SK18のみである。深さはSK17以外10cm程度で上面がかなり削平をうけていると考えられる。SK17は深さ40cmを測り、下底面わきより甕の完形品が出土している。掘り込み片肩部がやや袋状を呈する。

ピットは5cm程度の小円形のものが5基検出されたが底面は浅く、他の遺構との関係は不明であるがP1・P2はSD2を切る。

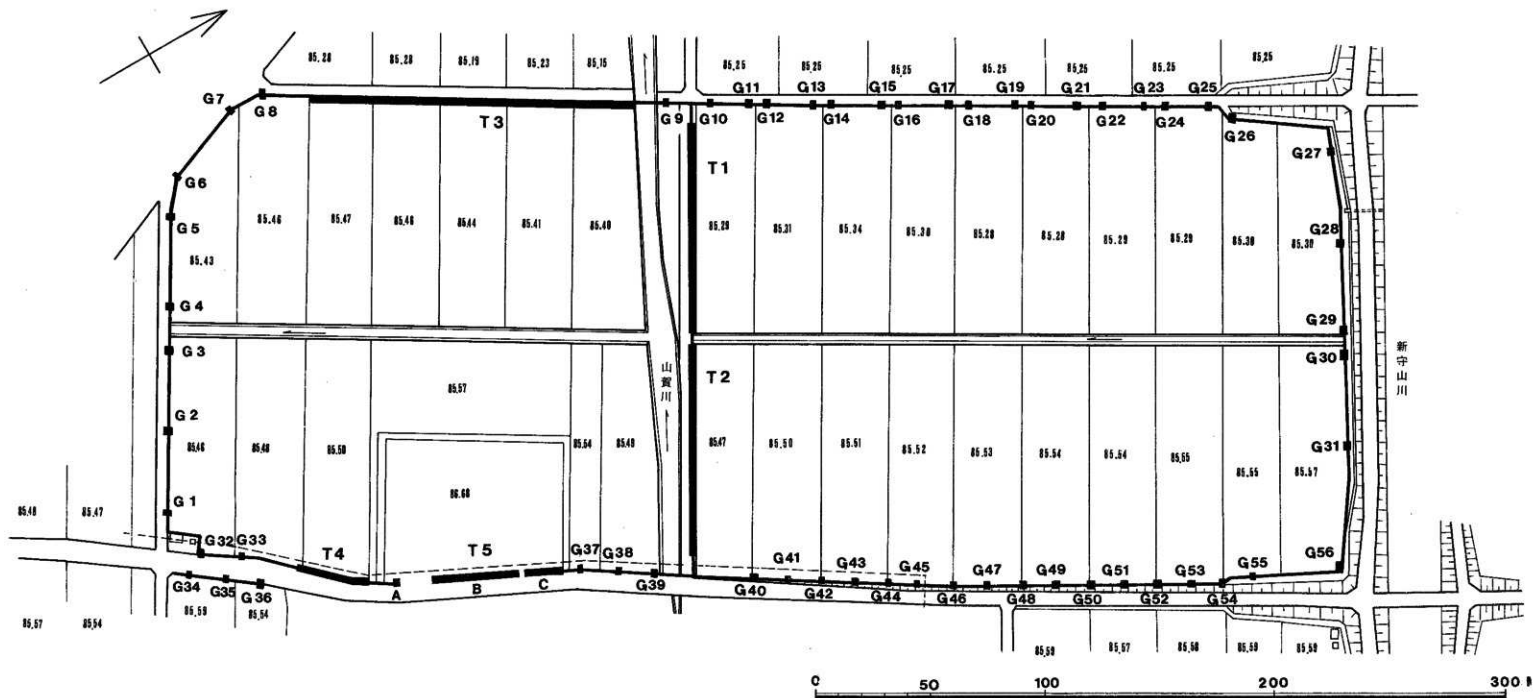
### T 2

T1に直接的に南につながり、基本層位も同じである。第Ⅲ層の黄灰色粘土層をベースに溝10条、土壌3基、ピット3基が検出された。

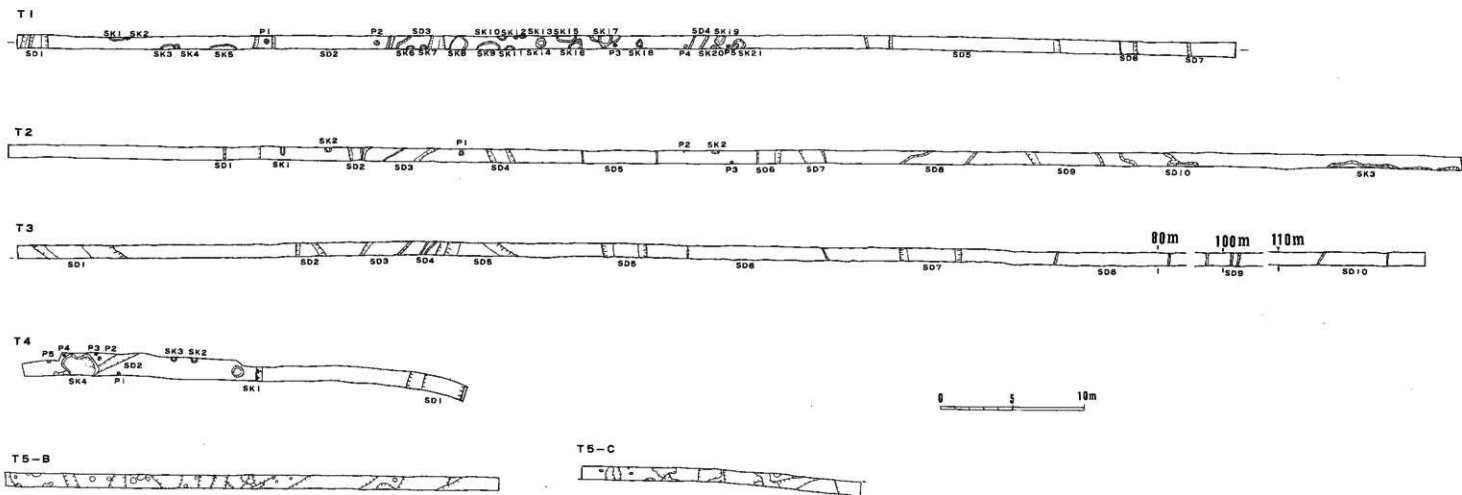
溝はT1・SD5とつながると思われるSD1以外深さ20cm以外のものが多いが、SD2のみは深さ50cmを測り、切り込みが「U」字状で鋭い。壺が倒立した状況で出土している。

土壌は、4基のうち、プラン全形が確認できるものがなく、詳細は不明である。SK4はおそらく以東のグリット調査で検出されている最下層の暗灰色粘土層につながるとと思われる。

ピットは3基検出され、それぞれのつながりは不明である。



第2図 調査区トレンチ配置図



第3図 連橋平面図および断面図

### T 3

山賀川以南、西端に位置する約120mのトレンチ内に耕土下約50～70cmで溝10条が検出された。SD4・SD6・SD8・SD9・SD10は切り込みが浅く、削平後に残った包含層の下部とも考えられるが、SD1・SD2・SD3・SD5・SD7は深さ50～80cmを測り、U字状に近い切り込みの形状を示している。埋土は濃暗灰色粘土層でどれも泥質がみで湧水が激しかった。後者の溝より多量の弥生土器、古式土師器片が出土する。

### T 4

今回の調査対象地の水田と現山賀集落を分断している農面道路の西側に沿い、一段高い北方の調査区より南の約30mのトレンチ内に溝2条、土壌4基、ピット5基が検出された。SD1以外は北方でまとまって検出され、耕土直下の黄灰色粘質土層を切り込む。そのベースはトレンチ中央で消滅し、SD1は次下の青灰色粘土層を切り込んでいる。

溝は南端のSD1が耕土下70cmで青灰色粘土を切りこみ、深さ1.5mまで確認できたが、それ以下は伏流水の湧水により、調査不可能であった。埋土は黒灰色泥粘土層である。多量の弥生土器、古式土師器片が出土した。SDはSK4と同一レベルで検出され、その上下関係は確認できなかった。

土壌はプラン全形が確認できたのはSK1のみで、SK2・SK3は円形のピットになるかと思われる。SK4が大形の異形を呈して、青灰色粘土上面まで切りこまれる。

ピット5基は径5cm未満のものばかりで浅い。

### T 5

現水田となっている他の調査区より約1m高い畑地である。この地点の工事深度が現表土より1.2mの予定となっており、遺物は表土下約80cmで出土しはじめ、1.1mで遺構面にあたる。その後の工事深度のレベルアップにより、遺構の掘込は行わなかった。包含層からは古代から中世にかけての土器細片が少量出土し、遺構面直上からは古墳時代から奈良時代にかけての遺物の検出をみた。プランにおいても遺構の切り合いがみうけられ、下層が古墳時代に上るかもしれない。(岩間)

## 5. 出土遺物

今回の調査によって出土した遺物は、総数 200 点余りに達した。土器の種類としては、弥生式土器を中心として、古式土師器、施釉陶器等、多種に及ぶ。主体となるものは、畿内第 V 様式の弥生式土器で、器種・出土量ともに、出土遺物の中で最も多い。

ここではまず、出土土器を分類する基準について述べたい。

### I 形態の分類

#### a. 弥生時代中期

##### (1) 壺

壺の器形は、広口壺、細頸壺、長頸壺、短頸壺、受口壺、二重口縁壺の 6 種類に分けた。

(1) 広口壺。口頸部及び本部の形によって、A～D に細分した。

・壺 A - 太く短かい頸部に水平近くに開く口縁部をもつ。口縁端部は上下にわずかに拡張する。

・壺 B - 大きく開く口縁部をもち、口縁端部は下方に肥厚するなど外端面を成す。

(2) 細頸壺。口頸部の長さ及び形態によって、A～B に細分した。

・細頸壺 A - 垂直に立ち上がる頸部に、内彎気味に開く口縁部をもつ。

##### (2) 甕

甕は今回の出土遺物の中では、最も多く出土した器種である。しかしそのほとんどが破片であり、口縁部及び体部の形態により A～D に細分した。

(1) 甕 A 受口状口縁を呈するものである。口縁部の形態により、A-1 から A-17 に細分した。

・甕 A-1 口頸部は「S」字状を呈し、上外方へ開く。口縁端部は上下へ肥厚して外端面を成す。

・甕 A-2 外彎してのびる頸部より、短かく直立して立ち上がる口縁部をもつ。

(2) 甕 B 「く」字状口縁を呈するものである。口縁部の形態により B-1 から B-2 に細分した。

・甕 B-1 口縁部は大きく外反して水平近くに開く。端部は丸く納まり、刻み目が施される。



## b. 弥生時代後期・古式土師器

### (1) 壺

#### (1) 広口壺

○壺A—全体的になだらかなカーブをもって外反する口頸部をもつ。従って口頸部から肩部にかけての移行はスムーズと思われる。

○壺B—短かく直立気味に立つ頸部に直線的に大きく外傾する口縁部をもつ。口縁端部は上方へつまみ上げる。

○壺C—球形あるいは偏球形の体部に巻き込むように外反する口頸部をもつ。

#### (2) 細頸壺

○細頸壺A—口頸部が長く直立するもの。体形が偏球状を呈すために、口頸部高は体高に比べて高い。

○細頸壺B—A形式よりも短かめの、外反する口頸部をもつ。口頸部高は体高にほぼ等しいか、それよりも小さい。

(3) 長頸壺。1点のみ出土した。口頸部がほぼ垂直に立ち上がり、直線的にのびる。

(4) 短頸壺。口頸部の形態により、A～Cに細分した。

○短頸壺A—口頸部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁端部はさらに内反する。

○短頸壺B—口頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は短かく外反する。

○短頸壺C—口頸部は外反しながら立ち上がる。

(5) 受口壺。受口状口縁を呈する壺である。口頸部及び頸部の形態により2種類に分けた。

○受口壺B—1 口縁部は明瞭に屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部はつまみ出し、内傾する面を成す。

○受口壺A—2 口縁部は明瞭に屈曲し、上外方へ開く。口縁端部はつまみ出し、内傾する面を成す。

(6) 二重口縁壺。広口壺に口縁部を付加したもの。外反する口縁部をもつ。

### (2) 甕

#### (1) 甕A

○甕A—1 頸部は明瞭に屈曲しほぼ水平な頸部を成す。口縁部は垂直あるいは内彎気味に立ち上がり、端部は内傾する面を成す。肩部はあまり張らず、最大腹径は下に

あると思われる。

- 蹠A-2 口顎部は水平に開き、垂直に立ち上がる口縁部をもつ。端部は丸く納めるが、内傾した面を成す。
- 蹠A-3 口顎部が内傾し、上外方へ開く口縁部をもつ。端部は水平か、内傾する面を成す。
- 蹠A-4 口縁部は明瞭に屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部はつまみ出し、内傾する面を成す。
- 蹠A-5 頸部で屈曲した後、直立気味に比較的長い口縁部をもつ。口縁端部は丸く納める。
- 蹠A-6 口縁部は明瞭に屈曲し、上外方へ開く。口縁端部はつまみ出し、内傾あるいは浅い段を成す。
- 蹠A-7 口縁部は甘く屈曲し、上外方へ開く。口縁端部はつまみ出し、内傾あるいは水平な面を成す。
- 蹠A-8 口縁部は甘く屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部はつまみ出し、水平あるいは浅い凹面を成す。
- 蹠A-9 口縁部は甘く屈曲し、上外方へ開く。口縁端部はつまみ出し、外傾する面を成す。
- 蹠A-10 鈍い段を成し立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部はわずかに外方へつまみ出す。
- 蹠A-11 なだらかな屈曲で中位でふくらむ口縁部をもつ。口縁端部はわずかにつまみ出す。
- 蹠A-12 頸部で屈曲した後、短かく立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は外傾する面を成す。
- 蹠A-13 頸部は「く」字状口縁に近い屈曲を成し、口縁部はわずかに内彎気味に立ち上がる。
- 蹠A-14 頸部はなだらかに屈曲し、短かく、ほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもつ。
- 蹠A-15 口縁部は上外方へ開き、口縁端部は内傾する面を成す。肩部はやや張り、器壁は薄手である。
- 蹠A-16 口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は丸いか尖り気味に納める。

肩部はあまり張らず、器壁は薄手である。

◦ 甕A-17 口縁部はやや外方へ開き、端部は丸く納める。肩部はあまり張らず、器壁は薄手である。

#### (2) 甕B

◦ 甕B-1 口頸部が「く」字状に屈曲し、直線的に開く。

◦ 甕B-2 口頸部は「く」字状に屈曲し、外反気味に開く。

(3) 甕C 口頸部は「く」字状に屈曲し、口縁端部を内傾へ肥厚させる布留式に通有なもの。

(4) 甕D 垂直にのびる体部より屈曲して上外方へ開く口縁部をもつ。端部はさらに外反し丸く納める。

#### (3) 浅鉢

浅鉢は数点出土している。胴位中位が張った扁平な体部をもつものが多い。口縁部の形態により、2種類に分けた。

浅鉢A 受口状口縁を呈するもので、口縁部の形態によりA-1からA-4に細分した。

◦ 浅鉢A-1 頸部で明瞭に屈曲して、短かく垂直に立ち上がる口縁部をもつ。

◦ 浅鉢A-2 頸部でなだらかに屈曲して、内彎気味に長く立ち上がる口縁部をもつ。端部は内傾する面を成す。

◦ 浅鉢A-3 頸部でなだらかに屈曲して、内彎気味に立ち上がる口縁部をもつ。端部は丸く納める。

◦ 浅鉢A-4 頸部でなだらかに屈曲して、外反気味に開く口縁部をもつ。端部は上方へつまみ上げ尖り気味に納める。

浅鉢B 「く」字状口縁を呈するもの。今回は1点のみ出土した。

◦ 浅鉢B-1 頸部は「く」字状に屈曲し、やや内彎気味に開く口縁部をもつ。端部は丸く納める。

#### (4) 埴

埴は2点出土している。いずれも破片なので、口縁部の形態で分類した。

◦ 埴A-口頸部はなだらかな「S」字状を呈する。端部は丸く納める。

◦ 埴B-半球状の体部を呈する。口縁端部は外傾に肥厚して丸く納める。

## (5) 高坏

高坏は10数点出土しているが、全形を留めるものは1点のみであり、大半が脚柱部であった。ここでは、坏部を2種類、脚柱部を3種類に分けた。

- 坏A—大きな坏部に外反する口縁部をもつ。坏部との界には稜線を有する。
- 坏B—半球状の坏部で、平底の坏底部より、丸く内彎してのびる口縁部をもつ。
- 脚A—脚柱部がややふくらみ、なだらかに外反して開く裾部をもつ。
- 脚B—脚柱部は「ハ」字状を呈して、直線的に開くもの。
- 脚C—脚柱部が筒状を呈して、なだらかに開く裾部をもつ。

## (6) 器台

器台も高坏同様、全形を留めるのは1点のみである。大半が脚柱部であり、坏部を1種類、脚柱部を3種類に分けた。

- 坏A—直線的に大きく開く坏部をもつ。口縁端部は下垂して、外端面を成す。
- 脚A、B、Cは高坏の脚柱部と同様の基準で分類した。その他、底部、施釉陶器等数点出土しているが、形態分類するには至らないので、後述説明を加えることにする。

## Ⅱ 土器類の観察について

本地区の調査において出土した土器類は、前述のごとくかなりの量を数える。その内、実測図を作成しえたものは196点を数え、その半数近くが個々の形態・技法をある程度、観察しうるものであった。よって、観察した結果を表にまとめ、掲載することにした。記載内容は、器種・法量・形態・技法・胎土・焼成の各項目について行った。

### a 技法の特徴の表現法

技法の特徴は、成形・調整・文様に大別して観察した。

調整及び文様は、本地区出土のものについて、下記のものを観察し、各々細分して表記した。又、実測図においては、下図の表現法を原則として行なった。

1. 篋ミガキ 細かい篋状工具で器壁表面をナデ、その痕が光沢をもつもの。
2. ハケ目 一定の幅をもつハケ状の工具で器壁を整え、明瞭にハケ目が残るもの。
3. タタキ タタキ板で器壁をたたいて形を整えるもので、調整と粘土のタタキシメの両方かねるもの。

4. ナデ 指で器壁をなであげて形を整えるもの。
5. 指圧痕 指で器壁を押して形を整えるもの。
6. 篋削り 静止状態でタテないしヨコ方向に篋削りしたものを表す。
7. 篋描列点文 櫛の先端を器面に突き刺してつくる文様（以下「櫛列」と略す。）
8. 櫛描直線文 櫛で一度に数本以上の条線を引く文様（以下「櫛直」と略す。）
9. 櫛描波状文 櫛で一度に数本以上の条線を蛇行して引く文様（以下「櫛波」と略す。）
10. 篋描直線文 篋で条線を引く文様（以下「篋直」と略す。）
11. 篋描斜格子文 篋で条線を直交して引く文様（以下「篋格」と略す。）
12. 円形浮文 粘土の小円板を貼り付けたもの（以下「円浮」と略す。）

#### b 胎土の表現法

胎土は含有砂粒を観察して記した。粒径の区分は、含まれる砂粒の内、平均的なものについて、35mm以上は小石粒、1mmから35mmは砂粒、1mm以下は細砂粒として、砂粒がほとんど含まれないものは胎土密とした。

#### c 色調の表現法

色調は目測で比定した。器壁の内面、外面で色調が異なる場合はそれぞれ記した。

#### d 焼成の表現法

焼成はその状態に応じて、良好、やや軟質、軟質に分けて記した。

### Ⅲ 出土土器の検討

今回の調査ではT1からT4の各遺構で遺物が出土した。まず、遺構別に出土土器の説明を加え、その後、弥生時代後期を中心にその位置づけを試みたい。

#### a T1

- SD1 弥生第V様式中葉の甕2点、布留式併行期の甕3点、その他土鍾が1点出土しており、SD1は弥生後期から布留式併行期まで存続したとみられる。
- SD5 弥生中期頃の細頸壺1点、弥生第V様式前葉頃の甕1点、庄内式併行期頃の二重口縁壺1点、布留式併行期頃の甕1点、その他土鍾が1点出土している。SD5は弥生中期から布留式併行期の遺物が混在している。
- SD6 弥生第V様式中葉から後葉頃の広口壺1点、甕2点、高環1点、器台脚部1点と、布留式併行期の甕6点、その他土鍾が1点出土している。SD6は弥生後期

から布留式併行期まで存続したとみられる。

・SK 9 弥生第V様式後葉から、庄内式平行期頃の高坏が1点と土鍾が4点出土している。

・SK 17 弥生中期後葉から弥生第V様式初頭の甕が1点のみ出土している。

・出土地不明 弥生中期の甕1点、弥生第V様式中葉の甕1点、甕底部1点、高坏脚部1点、その他土鍾が1点出土している。

#### b T2

・SD 2 弥生中期の壺底部1点、弥生第V様式中葉の受口壺1点と短頸壺が1点出土している。SD 2は、弥生中期と後期が混在していると思われる。

#### c T3

・ベース直上 11世紀前葉から後葉の灰釉埴底部が2点出土している。

・SD 1 弥生中期の広口壺1点、甕4点と、弥生第V様式中葉の長頸壺1点、有孔鉢が1点出土している。SD 1は、弥生中期に後期が混入したものと思われる。

・SD 2 受口甕が1点のみ出土しているが、現時点では時期は不明である。

・SD 3 布留式併行期の甕2点と、11世紀頃の灰釉埴底部が2点出土している。SD 3は2時期の遺物が混在していると思われる。

・SD 4 T3の中では最も多量の遺物が出土した遺構である。弥生中期の土器としては、広口壺1点、壺体部1点、器台1点があり、弥生第V様式は広口壺6点、短頸壺2点、受口壺2点、甕7点、浅鉢2点、高坏6点、器台6点、甕底部4点、鉢底部1点、有孔鉢2点が出土している。その他古墳時代頃の甕12点、浅鉢2点、小型丸底壺底部1点、埴2点と、11世紀頃の灰釉埴底部が2点出土している。SD 4は、弥生時代後期と布留式併行期の2時期を主として、弥生中期と11世紀頃の遺物が混入したものと思われる。

・SD 5 弥生中期の甕1点、弥生第V様式中葉の広口壺1点、細頸壺1点、受口壺1点、甕1点、甕底部1点、鉢底部1点が出土している。また、布留式併行期の甕4点、11世紀頃の灰釉埴底部が1点出土している。SD 5は、弥生後期と布留式併行期を主として、弥生中期と11世紀頃の遺物が混入したものと思われる。

・SD 7 11世紀前葉から中葉の灰釉埴底部が1点のみ出土している。

・出土地不明、弥生中期の広口壺1点と弥生後期前葉の受口甕1点、布留式併行期の

受口甕が3点出土している。

#### d T4

◦SD1 今回の調査で最も多量の土器を出土した遺構である。弥生第V様式中葉の  
広口壺1点、細頸壺1点、受口壺5点、甕25点、浅鉢1点、高坏脚部6点、器台脚部  
4点と、古墳時代初頭頃の甕19点、浅鉢1点、その他新しい時期のものと思われる甕  
が1点出土している。SD1は、弥生後期から古墳時代初頭まで存続したとみられる。

### Ⅳ ま と め

今回の調査では、4つのトレンチから総数196点の遺物が出土した。ここでは、ま  
とめとして、器種ごとに考察を加えることにする。

#### a. 弥生時代中期

##### ◦広口壺

漏斗状のびる口頸部にやや偏球状の体部を有する壺と思われる。器体外面は口頸  
部から体部上半にかけて櫛描直線文をめぐらす。大中の湖南遺跡・南志賀遺跡・赤野  
井遺跡・金ヶ森西遺跡等から類似品が出土している。畿内第Ⅱ様式の新段階に併行す  
るものと思われる。

##### ◦細頸壺

内方に曲折する口縁部とソロバン玉状の器体をそなえた細頸壺としては、伊勢湾地  
方の弥生時代第Ⅱ様式そのものの搬入品と、本地方におけるその模倣品とがあり、さ  
らに口縁部の曲折がよく装飾も上述の土器とは異って、むしろ弥生時代第Ⅱ様式土  
器の細頸壺との関係が考えられるものがある。前三者においては、伊勢湾ふうの装飾  
が支配的で、複帯構成を主とする直線文と縦位の波状文・短線文・重弧文などの直線  
文状の加飾が目立っている。後者では、単帯構成の櫛描直線文・波状文を交互におく  
ものと、複帯構成の直線文をもちいるものがある。

当遺跡出土の細頸壺は、調整などからしてこれらより新しいタイプのものと思わ  
れる。

##### ◦甕A-2

体部の張りがほとんどなく、全くのなで肩である。頸部は弥生時代後期のように  
「く」字状にすぼまることはなく、ゆるやかに外方へ開いている。口頸部外面は受

口状を呈し、内面は明瞭な稜線を付けずゆるやかに口縁端部に連する等、近江における畿内第Ⅳ様式併行の甕形土器として典型的様相を示す。さらに、内外面共粗いハケ目<sup>注5</sup>で仕上げていることもこの時期の特徴である。雄琴高峰遺跡・五ノ里遺跡<sup>注5</sup>で出土しているが、頸部の彎曲状況、口縁部内面の立ち上がりによる稜線の有無など、当遺跡出土の物の方が古相を示すと思われる。

## b. 弥生時代後期・古式土師器

### ○甕

甕では、「受口状口縁」のものが大半を占め、その盛行期である弥生時代後期において、多様なあり方を示すため、形態・調整等で先後を容易に決めがたい。ただ、その系譜をたどろうとするなら、弥生時代中期（畿内第Ⅳ様式）の段階には確実に存在していることが確認されている。この時期の受口甕の特徴は、口頸部に比べて体部が小さく、両部外面には、櫛描列点文・櫛描直線文・櫛描波状文等の施文を行う。これは、ほぼ県下全域に分布し、主な遺跡としては、大津市湖西線関係遺跡<sup>注6</sup>、同市火伴遺跡<sup>注7</sup>、守山市服部遺跡<sup>注8</sup>、野洲町五ノ里遺跡<sup>注9</sup>、長浜市鳴田遺跡<sup>注10</sup>等が知られている。

弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）に入ると、受口状口縁を有し、外面に斜方列点文を施し、肩部から腹部にかけて櫛描列点文・直線文・波状文の文様を巡らせ、なだらかにふくらむ器形、内面横ナデ調整等の基本形が完成される。但し、個々の特徴にはかなりの相異もあり、口縁部外面ナデ調整を行う系統も、弥生時代第Ⅳ様式から引き続き存在する。また、体部内面をハケ調整するものもある。弥生時代第Ⅱ様式以来の近江系甕の特徴である甕を飾るという、近江独特の伝統を受け継ぐものもある。

庄内式土器に伴って出土する受口甕は、より体部が充実し、施文も簡略化の方向をたどる。

布留式併行期に入ると、湖西・湖南地域においては、畿内の圧倒的な影響力のもとに布留式が浸透して、受口甕の伝統は消失する傾向<sup>注11</sup>にある。しかし、湖東・湖北地域においては、布留式併行期に入っても依然その伝統は残り、丸底・球状の体部を有しながら受口状口縁を成す甕のように、両者の融合した形態も生れる。

上述のような「受口状口縁」甕の形態変遷の傾向と、周辺地域出土資料との比較をしながら、当遺跡出土の受口状口縁甕（以下甕Aと略す）を検討していく。

甕A-1は、口縁部が垂直に立ち上がり、端部は内傾する面を成す。また、口縁部



中位に直線的な列点文を施すなど、弥生時代後期前葉（畿内第V様式前葉）併行期頃の様相を示していると思われる。

甕A-2・3は、口縁端部を横ナデ調整するため、内傾した面を成し、わずかながら突出するものが多い。口縁部下に斜方列点文を刺突する傾向にあり、弥生時代後期中葉の様相を示すものと思われる。

甕A-4・6は、口縁端部の外方へのつまみ出しが著しくなり、口縁部全体が屈折してみえる。また、口縁部及び肩部の列点文を簡略化した篋描直線文を施す等、弥生時代後期後葉の様相を示すものと思われる。

甕A-7・8は、口縁端部を強くつまみ出し、外上方へのびる。口縁部外面の櫛及びハケ状工具による列点文はなく、無文又は篋描直線文を施すものがほとんどである。体部は丸味を帯びた球形に近づき、篋・ハケ状工具により粗く調整される等、庄内式併行期の様相を示すと思われる。

甕A-9・10・11は、口頸部が甘い屈曲となり、口縁部に施文が見られず、体部の篋・ハケ状工具による施文も乱雑で装飾性を感じさせないものが多く、またこうした施文もせず、ハケ目のみのものも多い等、布留式併行期の様相を示すと思われる。

甕A-12・5・14は、時期差によるものか、あるいは地域差によるものか、現時点においては判然としない。

甕A-13は、頸部が稜を成し、口縁部が立ち上がるもので、外面のタタキ目、内面<sup>注12</sup>のへら削り・ハケ調整等、北大津遺跡黒褐色土下層出土の甕B<sub>2</sub>と類似していることから弥生時代後期後葉頃の様相を示すものと思われる。

#### ○甕B

甕B-1・2は、畿内第V様式でもやや新しい傾向をおびる安満遺跡周溝墓一括品例及び、久野部遺跡の甕Cと類似している。これらより、畿内第V様式前葉から中葉の頃に相対的な年代を求められる。

甕Cは、端部を内側に肥厚させる布留式に通有なもので、県下では多くの遺跡で出土している。単純に「く」字状口縁で端部内面が鋭角に肥厚し、内面はへら削りを行い、体部は球状を呈する。上ノ井手井戸下層Ab類に類似しており、布留I式頃とみられる。

#### ○浅鉢

この種の鉢形土器は、受口状口縁甕と同じ手法によるもので、同じ近江にあっても湖北地方において鴨田遺跡等で確認されるごとく、弥生時代後期前半の時期に出現しているのに対して、湖南地方では服部遺跡SD-20の一括品中に見られるように、弥生時代後期初頭には、確実に存在している。A-4・5は、口縁部の形態、施文等に退化現象がみられるため、浅鉢の中で新しい時期（古墳時代前期初頭）に入ると思われる。

#### ・高坏

口縁部が外反することによって受部との稜線が明瞭化するものであるが、口縁部高はいぜん受部高におよばない。脚部は柱状脚部のもも残るが、多くは裾部のゆるやかに開く中空形態のものが圧倒的に多い。成形手法は円板充填手法のものが多いが、前型式のような連続成形は行わず、脚部成形後にあきらかに製作上のプレスを有している。

大型で坏部が深くて水平な底部を特徴とする欠山式の高坏が出現するのは、野洲を中心とする湖南地域では、富波遺跡<sup>注14</sup>や片岡遺跡<sup>注15</sup>等に見られるように、少し時期が下るのではないだろうか。高坏Aについて見てみれば、坏部中位の屈曲が甘いものがあるものの、馬場川遺跡の高坏より口縁部が長く外反するものがないことから、馬場川遺跡より先行し、また西ノ辻I地点式の高坏ほど鋭く屈曲し、強く立ち上がる口縁部もないので、これより後出的な形態と思われる。

高坏Bは、小型の精緻な高坏で、壙状の坏部をもつものである。北大津遺跡・入江内湖西野遺跡<sup>注17</sup>・金ヶ森西遺跡等で類似品が出土しており、庄内式併行かと思われる。

#### ・器台

坏部が直線的に開き、端部が下垂する口縁部をもち、脚柱部がふくらむ器台Aは、弥生時代後期中葉に通有なもので、県下各地で出土している。

器台Bはくびれ部からはほぼ対称的に外反し、受部及び脚部を形づくるもので、時期が新しくなるに従って、くびれ部が中位よりも上方へ移動して、小型化する傾向にあると思われる。

器台Cは円筒部から上下にはほぼ同じ様に外反し、受部と脚部を成形している。これらは比較的古いタイプのもので、分布については、地方によりやや相異があるが、日本海側（山陰・北陸）をのぞく西日本一帯に広がっているようである。<sup>注18</sup>特に（99）は

大型のもので、藤井寺市国府遺跡 S K - 3 ・唐古鍵遺跡 S D - 50 より類似品が出土して  
おり、畿内第 IV 様式末か、畿内第 V 様式前葉の頃と思われる。 (井浦)

<注>

- 注1. 水野正好『大中の湖南遺跡調査概要』(滋賀県文化財調査概要 第5集 滋賀県教育委員会) 1967年
- 注2. 滋賀県教育委員会『市滋賀遺跡発掘調査報告書』
- 注3. 山崎秀二『守山市赤野井遺跡』(滋賀県文化財調査年報 昭和51年度 滋賀県文化財保護協会) 1977年
- 注4. 滋賀県教育委員会『金ヶ森西遺跡発掘調査報告書』 1980年
- 注5. 滋賀県教育委員会『雄琴高峰高地性遺跡発掘調査報告書』
- 注6. 湖西線関係遺跡発掘調査閉『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』 1973年
- 注7. 滋賀県教育委員会『大伴遺跡発掘調査報告』 1983年
- 注8. 滋賀県教育委員会、守山市教育委員会、滋賀県文化財保護協会『服部遺跡発掘調査概要』 1979年
- 注9. 滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会『野洲郡野洲町五之串遺跡発掘調査報告』(昭和51年度滋賀県文化財調査年報) 1978年
- 注10. 滋賀県教育委員会『鴨田遺跡』(国道8号兼長浜バイパス関連遺跡調査報告書) 1973年
- 注11. 中西常雄『近江における寛形土器の動向-庄内期を中心として-』(考古学研究 125)
- 注12. 中西常雄・石原道洋・山口辰一ほか『北天津の変貌』 1979年
- 注13. 高槻市教育委員会『久美遺跡発掘調査報告書』(高槻市文化財調査報告書 第10冊) 1977年
- 注14. 丸山竜平・山口辰一ほか『野洲郡野洲町富波遺跡調査報告』(滋賀県文化財調査年報 昭和48年度 滋賀県教育委員会) 1975年
- 注15. 丸山竜平ほか『草津市片岡遺跡』(は規模備関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ-Ⅱ 滋賀県教育委員会) 1976年
- 注16. 東大阪市教育委員会『馬場川遺跡Ⅱ』(東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 14) 1975年  
下村晴文・福永信雄・芋木隆裕ほか『馬場川遺跡発掘調査報告』(東大阪市遺跡保護調査会) 1977年
- 注17. 田中勝弘ほか『矢倉川中小河川改修に伴う人江内湖西野遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会) 1977年
- 注18. 中西常雄・石原道洋・山口辰一ほか『北天津の変貌』 1979年
- 注19. 山本熊晴ほか『大阪府藤井寺市国府遺跡』(河内国府遺跡出土の弥生式土器) 1974年
- 注20. 小林行雄ほか『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告 第16冊) 1943年

### 山賀西遺跡出土遺物観察表

図版 番号	器形	出土 地点	法量 は復元値 単位 (cm)	形態の特 徴	成形手法の特 徴	色調土 胎焼 土成
1	甕 A-2	T1 SD1	口径 13.5	受口、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。端部は内傾する面を成す	口縁部内外面共横ナデ 外面口縁部襷列	淡茶褐色 密 良好
2	甕 A-2	T1 SD1	口径 18.0	受口、口縁部は垂直に立ち上がる。端部は内傾する面を成す	口縁部内外面共横ナデ 外面口縁部襷列	淡茶褐色 密 良好
3	甕 A-9	T1 SD1	口径 11.3	受口、口縁部は上外方へ開く。端部は外傾する面を成す	内面口縁部ハクリ 外面口縁部横ナデ	暗乳白色 細砂含有 良好
4	甕 A-9	T1 SD1	口径 14.6	受口、口縁部は上外方へ開く。端部は外傾する面を成す	口縁部内外面共横ナデ	暗乳白色 細砂含有 良好
5	甕 A-11	T1 SD1	口径 11.6	受口、口縁部は上外方へ開く。端部はわずかにつまみ上げられる	外面口頸部横ナデ 外面体部ハクリ	淡茶色 細砂含有 良好
6	土罐 A	T1 SD1	径 2.5 器高 2.0	半球状を成す 中央部に 0.7cm 程の円孔を穿つ	手づくね	淡灰褐色 細砂含有 軟質
7	細頸壺 (中A)	T1 SD5	口径 9.2	口縁部は内窩気味に立ち上がる。端部は丸く納める	外面口縁部ハケ調整 内面口縁部指痕	淡褐色 細砂含有 良好
8	甕 A-9	T1 SD5	口径 18.0	受口、口縁部は上外方へ開く。端部は外傾する面を成す	口縁部内外面共ハクリ	淡橙色 細砂含有 軟質
9	甕 A-1	T1 SD5	口径 15.8	受口、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。端部は内傾する面を成す	外面口縁部襷列 外面頸部横直	暗乳白色 細砂含有 良好
10	二重口 縁壺	T1 SD5	口径 23.1	口縁部は外反、端部は丸く肥厚する	口縁部内外面共横ナデ	淡褐色 細砂含有 良好
11	土罐A	T1 SD5	径 2.5 器高 1.8	半球状を成す ほぼ中央部に 0.5cm 程の円孔を穿つ	手づくね	淡褐色 細砂含有 良好
12	広口壺 A	T1 SD6	口径 11.5	口縁部は直線的に開く	口頸部内外面共横ナデ	淡赤褐色 細砂含有 軟質
13	甕 A-2	T1 SD6	口径 11.6	受口、口縁部は垂直に立ち上がる。端部は内傾する面を成す	内面口縁部横ナデ 外面口縁部襷列	淡茶褐色 密 良好
14	甕 A-4	T1 SD6	口径 13.9	受口、口縁部は垂直に立ち上がる。端部は上外方へつまみ出す	口縁部内外面共ハクリ	赤橙色 細砂含有 良好
15	甕 A-7	T1 SD6	口径 16.0	受口、口縁部は上外方へ開く。端部は外方へつま	口頸部内外面共横ナデ	淡茶褐色 細砂含有

図版 番号	器形	出土 地点	法 量 量は復元値 単位 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 手 法 の 特 徴	色 調 胎 土 成
				み出し水平な面を成す		良好
16	甕 A-8	T1 SD6	口径 12.8	○受口、口縁部は外反気味に立ち上がる。端部は上外方へつまみ出し内傾する面を成す	○口頸部内外面共横ナデ	暗黄色 細砂含有 良好
17	甕 A-9	T1 SD6	口径 14.5	○受口、口縁部は上外方へ開く。端部は外力へ強くつまみ出す	○口頸部内外面共横ナデ ○内面体部ヘラケズリ ○外面体部ハクリ	暗黄色 細砂含有 軟質
18	甕 A-10	T1 SD6	口径 13.8	○受口、口縁部は上外方へ開く。端部は外方へつまみ出す。	○口頸部内外面共横ナデ ○外面体部ハケ調整	暗乳白色 細砂含有 やや軟質
19	甕 A-1	T1 SD6	口径 16.4	○受口、口縁部は垂直に立ち上がる。端部は内傾する面を成す	○内面口頸部ハクリ ○外面口縁部横列	淡茶色 細砂含有 軟質
20	甕 C	T1 SD6	口径 15.4	○「く」字状に外反、端部は内面に肥厚	○口頸部内外面共横ナデ	淡褐色 細砂含有 やや軟質
21	高 杯 A	T1 SD6	口径 24.2	○口縁部は外反 ○脚柱部は「ハ」字状に開く	○杯部内外面共ヘラミガキ ○外面脚柱部ヘラミガキ	淡乳赤褐色 密 良好
22	器 合 脚C	T1 SD6		○脚柱部は筒状を成し、底部がなだらかに開く	○内面脚柱部はしぼり目 ○外面脚柱部はハケ調整 ○透孔 3ヶ所	淡赤褐色 密 良好
23	土鉢A	T1 SD6	径 2.1 器高 2.0	○偏球状を成す ○ほぼ中央部に0.25cm程の円孔を穿つ	○手づくね	淡褐色 細砂含有 やや軟質
24	高杯B	T1 SK9	口径 11.1	○深い半球状の杯部をもつ ○端部は丸く納める	○内面杯部ハクリ ○外面杯部ヘラミガキ	淡茶褐色 密 良好
25	土鉢A	T1 SK9	径 2.5 器高 2.1	○偏球状を成す ○ほぼ中央に0.8cm程の円孔を穿つ	○手づくね	淡黄褐色 細砂含有 やや軟質
26	土鉢A	T1 SK9	径 2.5 器高 2.4	○偏球状を成す ○ほぼ中央に0.6cm程の円孔を穿つ	○手づくね	淡灰褐色 細砂含有 軟質
27	土鉢A	T1 SK9	径 2.3 器高 2.1	○偏球状を成す ○ほぼ中央に0.9cm程の円孔を穿つ	○手づくね	外面淡灰褐色 内面淡赤褐色 細砂含有 良好
28	土鉢A	T1 SK9	径 2.2 器高 2.1	○偏球状を成す ○ほぼ中央部に0.9cm程の円孔を穿つ	○手づくね	淡黄褐色 細砂含有 軟質

図版 番号	器形	出土 地点	法 量 量は復元値 単位 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 手 法 の 特 徴	色 調 胎 土 成
29	頸中 A-1	T 1 S K 17	口径 17.5 腹径 17.7 器高 22.4	○口縁部は外反し上外方へのびる。端部は上方へ肥厚し外端面を成す ○体部は扁球状を成す ○底部はやや突出した上げ底を呈する	○口縁外端面、櫛直 ○口頸部内外面共ハケ調整 ○体部外面ハケ調整後櫛直	暗茶褐色 小砂含有 良好
30	甕 A-1	T 1 不明	口径 12.9	○受口、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は内傾する面を成す	○口縁部内外面共横ナデ ○外面頸部ハケ調整	外面暗黄色 内面明灰黄色 細砂含有 良好
31	頸中 A-2	T 1 不明	口径 18.1	○口縁部は外反し短かく立ち上がる。端部は上外方へつまみ上げる	○口頸部内外面共ハケ調整 ○内面体部指圧後ハケ調整 ○外面体部ハケ調整、篋直	茶褐色 細砂含有 良好
32	高坏 脚 C	T 1 不明		○脚柱部は筒状を成す	○内面脚柱部しぼり目 ○透孔3ヶ所	淡乳赤褐色 密 良好
33	甕底部	T 1 不明	底径 4.8	○やや突出した上げ底を呈する	○底部内外面ハケ調整	淡褐色 細砂含有 良好
34	土器B	T 1 不明	径 2.2 器高 5.6	○円柱状を成す ○ほぼ中央部に1.0cm程度の円孔を穿つ	○手づくね	淡褐色 細砂含有 良好
35	受口蓋 A-2	T 2 S D 2	口径 14.2	○受口、口縁部は上外方へ開き、端部は内傾する面を成す ○頸部はほぼ垂直に立ち、屈曲して体部へ続く	○外面口縁部櫛列 ○外面頸部ハケ調整 ○外面体部ハケ調整後、櫛直、櫛列	暗乳白色 細砂含有 良好
36	短頸直 立蓋A	T 2 S D 2	口径 10.9	○口縁部はやや内弯気味に立ち上がる。端部は丸く納める	○口頸部内外面共ハクリ	暗乳白色 細砂含有 良好
37	壺底部	T 2 S D 2	腹径 23.9 底径 5.6	○体部は扁球状を呈する ○底部は突出した上げ底を成す	○外面体部ハケ調整後ヘラミガキ ○内面体部篋削り後ハケ調整 ○底部ヘラミガキ	茶褐色 細砂含有 良好
38	灰輪壇 底部	T 3 ベース	底径 8.0	○平底を呈し、端部は丸く納める	○ロクロ作り、貼り付け高台	黄味白色 細砂含有 良好
39	灰輪壇 底部	T 3 ベース	底径 5.7	○平底を呈し、高台は「ハ」字状を成す	○ロクロ作り、貼り付け高台	淡褐色 細砂含有 良好
40	広口蓋 付 A	T 3 S D 1	口径 31.6	○口頸部は大きく外反して開く。端部は丸く納める	○口縁外端面刻み目 ○外面頸部櫛直、櫛直	灰黄色 小砂含有

図版 番号	器形	出土 地点	法 量 番は復元値 単位 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 手 法 の 特 徴	色 調 胎 土 成
						良好
41	壺中B	T3 SD1	口径 $\Phi$ 13.8	○口頸部は大きく外反して開く。端部は下方へ肥厚する	○口縁外端面刻み目 ○口縁部内外面共ハケ調整	淡茶褐色 小砂含有 良好
42	壺中B	T3 SD1	口径 $\Phi$ 15.4	○口頸部は大きく外反して開く。端部は丸く納める	○内面口縁部、櫛波 ○外面口縁部ハケ調整	黒褐色 細砂含有 軟質
43	壺中B	T3 SD1	口径 $\Phi$ 13.0	○口頸部は大きく外反して開く。端部は丸く納める	○外面口縁部、刻み目 ○内面口縁部ハケ調整 ○外面頸部ハケ調整	暗赤褐色 小砂含有 良好
44	壺中B	T3 SD1	口径 $\Phi$ 16.8	○口縁部は巻き込むように外反、端部はやや下垂する	○外面口縁部、刻み目 ○内面口縁部ハケ調整 ○頸部内外面共ハケ調整	暗茶褐色 小砂含有 良好
45	長期壺 A	T3 SD1	口径 $\Phi$ 13.0	○口縁部は外傾気味に立ち上がる。端部は外傾する面を成す	○口縁部内外面共ハケ調整	灰褐色 細砂含有 良好
46	有孔鉢	T3 SD1	底径 4.6	○突出した平底を成す。中央部に0.6cm程の円孔を穿つ	○外面体部ハケ調整	淡褐色 小砂含有 良好
47	壺 A-15	T3 SD2	口径 $\Phi$ 13.1	○受口、口縁部は上外方に開く。端部は内傾する面を成す	○外面口縁部、刻み目	淡褐色 小砂含有 軟質
48	壺 A-14	T3 SD3	口径 $\Phi$ 15.6	○受口、口縁部は短かく立ち上がり端部は内傾する面を成す	○外面頸部ハケ調整	灰褐色 細砂含有 軟質
49	壺 A-17	T3 SD3	口径 $\Phi$ 14.4	○受口、口縁部は上外方に開く。端部は尖り気味に納める	○口頸部内外面共横ナデ	黄褐色 細砂含有 良好
50	緑釉塊 底部	T3 SD3	底径 $\Phi$ 8.7	○上げ底を呈する	○貼り付け高台、高台内面 寛削り	暗緑黄色 精良 良好
51	塊底部	T3 SD3	底径 $\Phi$ 5.8	○上げ底を呈する。高台は「ハ」字状に開く	○貼り付け高台、ロクロ作り	灰色 精良 良好
52	広口壺 中B	T3 SD4	口径 $\Phi$ 17.8	○口縁部は大きく外反して端部は下方に肥厚する	○口縁外端面、円浮 ○口頸部内外面共ハケ調整	橙褐色 密 良好
53	壺体部	T3 SD4	腹径 $\Phi$ 29.0	○偏球状を呈する	○外面体部、櫛直	淡茶褐色 小砂含有 軟質
54	広口壺 A	T3 SD4	口径 $\Phi$ 11.8	○口縁部は「く」字状に外反する。端部は丸く納める	○口頸部内外面共横ナデ	淡褐色 細砂含有 良好

図版 番号	器形	出土 地点	法 量 は復元値 単位 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 手 法 の 特 徴	色 調 土 成 焼
55	広口壺 A	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 11.8	○口縁部は外反し、端部は丸く納める	○口頸部内外面共ハクリ	暗褐色 小砂含有 良好
56	広口壺 B	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 13.4	○口縁部は外反して短かく立ち上がる。端部は丸く納める	○口頸部内外面共ハケ調整	淡黄褐色 小砂含有 良好
57	広口壺 B	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 13.0	○口縁部は外反して短かく立ち上がる。端部は丸く納める	○外面口縁部、刻み目 ○外面頸部ハケ目	明褐色 小砂含有 良好
58	広口壺 B	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 11.2	○口縁部は外反して短かく立ち上がる。端部は丸く納める。	○外面口頸部横ナデ ○内面口頸部ハクリ	黄褐色 細砂含有 良好
59	広口壺 C	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 13.0	○口縁部は巻き込むように外反する。端部は上下に肥厚する	○口縁外端面、寛直	淡黄褐色 細砂含有 良好
60	短頸直 立壺C	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 10.2	○口縁部は上外方へ外反する。端部は丸く納める	○口縁部内外面共横ナデ	淡茶褐色 小砂含有 良好
61	短頸直 立壺B	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 9.0	○口縁部は垂直に立ち上がり、短かく外反する。端部は丸く納める	○内面口頸部、筋削り ○外面口縁部横ナデ ○外面口頸部ハケ調整	灰褐色 小砂含有 良好
62	受口壺 A-1	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 11.8	○受口、口縁部は垂直に立ち上がり端部は内傾する面を成す	○口頸部内外面共横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
63	受口壺 A-1	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 14.8	○受口、口縁部は垂直に立ち上がり端部は内傾に肥厚し、内傾する面を成す	○外面口縁部、櫛列	黄褐色 細砂含有 良好
64	壺 A-3	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 17.3	○受口、口縁部は上外方に開き、端部は内傾する面を成す	○外面頸部、櫛列 ○口縁部内外面共横ナデ	淡灰褐色 小砂含有 良好
65	壺 A-11	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 11.6	○受口、口縁部は中位でふくらみ、端部は外方へつまみ出す	○外面口頸部ハケ調整	暗茶褐色 小砂含有 軟質
66	壺 A-12	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 18.0	○受口、口縁部は短かく立ち上がり端部はやや外傾する面を成す	○外面口縁部、櫛直、櫛列 ○外面頸部、櫛列	黄褐色 小砂含有 軟質
67	壺 A-5	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 16.6	○受口、口縁部は長く垂直に立つ。端部はわずかに外反し、丸く納める	○外面頸部、櫛列 ○外面肩部、櫛列、櫛直	灰褐色 小砂含有 軟質
68	壺 A-1	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 13.5	○受口、口縁部は上外方へ開き、端部は丸く納める	○外面口頸部、櫛列 ○内面口頸部横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
69	壺 A-1	T 3 SD 4	口径 $\phi$ 14.4	○受口、口縁部は垂直に立ち上がり、端部はわずか	○外面口縁部、櫛列 ○内面口頸部横ナデ	灰橙黄色 小砂含有



図版 番号	器形	出土 地点	法量 は復元値 単位 (cm)	形態の特 徴	成形手法の特 徴	色調土 胎土成
				に内面に肥厚し、内傾する面を成す		良好
70	甕 A-1	T3 SD4	口径 $\Phi$ 21.0	○受口、口縁部は内高気味に立ち上がり、端部は内傾する面を成す	○外面口頸部、櫛列 ○内面口頸部横ナデ	灰褐色 小砂含有 軟質
71	甕 A-14	T3 SD4	口径 $\Phi$ 14.0	○受口、口縁部はほぼ垂直に短く立ち上がる。端部はわずかに内傾する面を成す	○口頸部内外面共横ナデ	暗褐色 小砂含有 軟質
72	甕 A-14	T3 SD4	口径 $\Phi$ 14.2	○受口、口縁部は垂直に短く立ち上がる。端部は内傾する面を成す	○外面頸部、櫛列 ○口縁部内外面共横ナデ	灰褐色 小砂含有 良好
73	甕 A-15	T3 SD4	口径 $\Phi$ 11.8	○受口、口縁部は上外方に開く。端部は内傾する面を成す	○口頸部内外面共横ナデ	乳褐色 細砂含有 良好
74	甕 A-15	T3 SD4	口径 $\Phi$ 17.0	○受口、口縁部は上外方に開く。端部は内傾する面を成す	○内面口頸部横ナデ ○外面頸部ハケ調整	淡赤褐色 細砂含有 軟質
75	甕 A-16	T3 SD4	口径 $\Phi$ 14.4	○受口、口縁部は上外方に開く。端部は丸く納まる	○口頸部内外面共横ナデ	黒褐色 小砂含有 軟質
76	甕 A-17	T3 SD4	口径 $\Phi$ 10.8	○受口、口縁部は上外方に開く。端部は尖り気味に納まる	○口頸部内外面共横ナデ	淡黄褐色 細砂含有 良好
77	甕 A-17	T3 SD4	口径 $\Phi$ 15.6	○受口、口縁部は上外方に開く。端部は尖り気味に納まる	○口縁部内外面共横ナデ	灰褐色 細砂含有 良好
78	甕 A-17	T3 SD4	口径 $\Phi$ 16.6	○受口、口縁部は上外方に開く。端部は丸く納まる	○口縁部内外面共横ナデ	暗褐色 小砂含有 軟質
79	甕 A-17	T3 SD4	口径 $\Phi$ 15.4	○受口、口縁部は上外方に開く。端部は丸く納まる	○口頸部内外面共横ナデ	淡褐色 細砂含有 良好
80	甕 B-1	T3 SD4	口径 $\Phi$ 15.8	○受口、口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸く納まる	○内面口縁部ハケ目	淡黄褐色 細砂含有 良好
81	甕 B-1	T3 SD4	口径 $\Phi$ 13.4	○口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸く納まる	○口頸部内外面共横ナデ	褐色 小砂含有 良好
82	広口壺 A	T3 SD4	口径 $\Phi$ 12.0	○口縁部は上外方に外反する。端部は丸く納まる	○口縁部内外面共横ナデ	褐色 小砂含有 軟質
83	浅鉢 A-1	T3 SD4	口径 $\Phi$ 15.2 腹径 $\Phi$ 15.6	○受口、口縁部は短く垂直に立つ。端部は内傾に	○外面口縁部、櫛列 ○外面体部ハケ調整後、櫛	灰黄色 細砂含有

図版 番号	器形	出土 地点	法 量 量は復元値 単位 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 手 法 の 特 徴	色 調 土 成
				肥厚し、内傾する面を成す ○体部は偏球状を成す	直、楕列	良好
84	浅鉢 A-2	T3 SD4	口径 13.4	○受口、口縁部は長く内弯 気味に立ち上がる。端部 はやや内傾に肥厚し、内 傾する面を成す	○外面口縁部、楕列 ○外面体部、楕直、楕列 ○内面口縁部整形	灰黄色 細砂含有 軟質
85	浅鉢 A-4	T3 SD4	口径 12.1 版径 10.8	○受口、口縁部は上外方に 外反して開く。端部は上 方へつまみ出す ○体部は偏球状を呈する	○口頸部内外面共横ナデ ○外面頸部、筈直	淡灰色 小砂含有 軟質
86	浅鉢B	T3 SD4	口径 18.6 版径 16.5	○口縁部は「く」字状に外 反する。端部は丸く納め る ○体部は半球状を呈する	○口頸部及び体部内外面共 横ナデ	淡褐色 細砂含有 良好
87	高环A	T3 SD4	口径 24.2 底径 17.3 器高 15.3	○大きな环部に外反する口 縁部を呈する。端部は丸 く納める ○脚柱部はややふくらみ、 なだらかに開く頸部をも つ	○环部及び脚部内外面共ハ クリ ○透孔3ヶ所	暗褐色 細砂含有 軟質
88	高环A	T3 SD4	口径 18.6	○口縁部は外反し上外方に 開く。端部は丸く納める	○口縁部内外面共横ナデ	淡黄褐色 密 良好
89	高环A	T3 SD4	口径 20.4	○口縁部は外反し上外方に 開く。端部は丸く納める	○内面口縁部ハクリ ○外面口縁部横ナデ後、ヘ ラミガキ	黄褐色 細砂含有 良好
90	高环 脚部A	T3 SD4		○脚柱部はややふくらみ、 裾部はなだらかに開く	○外面脚部ヘラミガキ ○内面脚部横ナデ ○透孔3ヶ所	黄灰色 密 良好
91	高环 脚部C	T3 SD4		○脚柱部は筒状を成し、裾 部はなだらかに開く	○外面脚部横ナデ ○透孔3ヶ所	淡黄色 密 良好
92	高环 脚部C	T3 SD4		○脚柱部は筒状を成し、裾 部はなだらかに開く	○外面脚部横ナデ ○透孔3ヶ所	淡黄色 細砂含有 軟質
93	器台A	T3 SD4	口径 17.3 底径 13.7 器高 12.6	○环部は直線的に大きく開 く。端部は下垂する ○脚部はなだらかに開き、 端部は丸く納める	○外面脚部ヘラミガキ ○环部内外面共ハクリ ○透孔3ヶ所	暗褐色 細砂含有 軟質
94	器台A	T3 SD4	口径 20.8	○环部は直線的に大きく開 く。端部は下垂する	○环部外端面、筈直 ○内面环部横ナデ ○外面环部ハケ調整	灰黄色 精良 良好
95	器台A	T3 SD4	口径 15.7	○环部は直線的に大きく開 く。端部は下垂する	○环部内外面共横ナデ	灰白色 密 良好

図版 番号	器形	出土 地点	法 量 は復元値 単位 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 手 法 の 特 徴	色 調 胎 土 成
96	器台 脚部A	T 3 S D 4		○脚柱部はふくらみ、裾部 はなだらかに開く	○脚部内外面共ハクリ ○透孔3ヶ所	淡黄灰色 細砂含有 軟質
97	器台 脚部C	T 3 S D 4		○脚柱部は筒状を呈し、裾 部はなだらかに開く	○外面脚部横ナデ	褐色 密 良好
98	器台 脚部C	T 3 S D 4		○脚柱部は筒状を呈し、裾 部はなだらかに開く	○外面脚部ハケ調整	灰黄色 細砂含有 良好
99	器台 脚部C	T 3 S D 4		○脚柱部は筒状を呈する	○外面脚部ハケ調整後、ヘ ラミガキ ○内面脚部、匱削り、指圧 痕 ○透孔3ヶ所	淡茶褐色 細砂含有 良好
100	臺底部	T 3 S D 4	底径 3.5	○突出せず平底を呈する	○外面体部ハケ調整	茶褐色 小砂含有 良好
101	臺底部	T 3 S D 4	底径 3.3	○やや突出した平底を呈す る	○外面体部ハケ調整	茶褐色 細砂含有 良好
102	臺底部	T 3 S D 4	底径 3.9	○突出せず平底を呈する	○底部内外面共未調整	黄灰色 小砂含有 良好
103	臺底部	T 3 S D 4	底径 3.9	○突出した平底を呈する	○体部内外面共ハクリ	暗灰色 小砂含有 良好
104	鉢底部	T 3 S D 4	底径 3.9	○やや突出した上げ底を呈 する	○底部内外面共ハクリ	暗褐色 小砂含有 軟質
105	埴底部	T 3 S D 4	底径 1.5 腹径 6.6	○丸底を呈する ○体部はほぼ球状を呈する	○体部内外面共ハクリ	褐色 細砂含有 良好
106	有孔鉢 底部	T 3 S D 4	底径 4.3	○突出する平底を呈する	○外面体部ハケ調整 ○底部にはほぼ1.2cm程の円 孔を穿つ	暗灰色 密 良好
107	有孔鉢 底部	T 3 S D 4	底径 3.3	○突出した平底を呈する	○外面底部ハケ調整 ○底部に0.7cm程の円孔を 穿つ	褐色 細砂含有 良好
108	埴底部	T 3 S D 4	底径 8.1	○平底を呈する。高台は「 ハ」字状に開き、端部は 丸く納める。	○底部内外面共横ナデ ○貼り付け高台	乳灰色 精良 良好
109	埴 A	T 3 S D 4	口径 10.4	○口頸部はゆるやかな「S」 字状を成す。端部は丸く 納める	○口頸部内外面共横ナデ	淡褐色 細砂含有 軟質

図版 番号	器形	出土 地点	法量 番号は復元値 単位 (cm)	形態の特 徴	成形手法の特 徴	色調 胎土 焼成
110	埴 B	T 3 SD 4	口径 8.8	○ 体部は半球状を呈する。 ○ 端部は外側に肥厚し丸く納める	○ 口頸部及び体部内外面共横ナデ ○ 外面頸部、篋直	淡褐色 細砂含有 良好
111	破片	T 3 SD 4			○ 外面、櫛直、櫛列	灰黄色 小砂含有 良好
112	破片	T 3 SD 4			○ 外面、櫛波	淡褐色 細砂含有 良好
113	埴	T 3 SD 4	口径 11.4	○ 体部は半球状を呈する ○ 口縁部は丸く納める	○ 口縁部及び体部横ナデ後施釉	灰緑色 精良 良好
114	頸中B	T 3 SD 5	口径 9.8	○ 口縁部は水平に開き、端部は丸く納める	○ 外面口縁部刻み目 ○ 内面口縁部、櫛波 ○ 頸部内外面共ハケ調整	赤褐色 細砂含有 軟質
115	広口蓋 B	T 3 SD 5	口径 14.8	○ 口頸部は外反して開き、短く立ち上がる。端部は丸く納める	○ 口頸部内外面共横ナデ ○ 外面肩部、櫛直、櫛列	灰黄色 小砂含有 良好
116	細頸蓋 A	T 3 SD 5	口径 8.4	○ 口頸部はほぼ垂直する。端部は尖らせる	○ 外面口頸部ヘラミガキ	淡灰褐色 細砂含有 軟質
117	受口蓋 A-1	T 3 SD 5	口径 13.6	○ 受口、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。端部はやや尖らせる	○ 外面口縁部、櫛列 ○ 内面口縁部横ナデ	淡褐色 細砂含有 良好
118	蓋 A-3	T 3 SD 5	口径 13.8	○ 受口、口縁部はやや上外方へ開く。端部は水平な面を成す	○ 外面口縁部、櫛列 ○ 内面口頸部横ナデ ○ 外面頸部、篋列 ○ 外面体部ハケ調整後、櫛直 ○ 内面体部篋削り後、ハケ調整	黄褐色 小砂含有 良好
119	蓋 A-11	T 3 SD 5	口径 14.4	○ 受口、口縁部は中位でふくらみ、端部は上方へつまみ上げる	○ 外面口縁部、篋列 ○ 外面頸部ハケ調整	暗灰褐色 細砂含有 良好
120	蓋 A-11	T 3 SD 5	口径 17.6	○ 受口、口縁部は中位でふくらみ、端部は外方へ肥厚し丸く納める	○ 口縁部内外面共横ナデ	暗褐色 小砂含有 良好
121	蓋 A-8	T 3 SD 5	口径 9.9	○ 受口、口縁部はほぼ垂直に立ち、端部はつまみ出す	○ 口縁部内外面共横ナデ ○ 内面体部篋削り	淡灰色 小砂含有 良好
122	蓋 A-16	T 3 SD 5	口径 15.0	○ 受口、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。端部は尖り気味に納める	○ 口頸部内外面共横ナデ	暗灰色 小砂含有 良好
123	蓋 A-17	T 3 SD 5	口径 10.0	○ 受口、口縁部は上外方へ開く。端部は尖り気味に	○ 口頸部内外面共ハクリ	淡褐色 小砂含有

図版 番号	器 形	出 上 地 点	法 量 量 は復元値 単位 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 手 法 の 特 徴	色 調 土 胎 焼 成
				納める		良好
124	鉢底部	T 3 SD 5	底径 3.1	○突出せず上げ底を呈する	○外面底部未調整 ○内面底部横ナデ	暗灰褐色 小砂含有 良好
125	甕底部	T 3 SD 5	底径 2.0	○突出した平底を呈する	○底部内外面共ハケリ	淡褐色 小砂含有 良好
126	破片	T 3 SD 5			○内面ハケ調整 ○外面、櫛歯、櫛列、竹管 文	灰黄色 精良 良好
127	埴底部 灰陶	T 3 SD 5	底径 9.3	○上げ底を呈する。高台は「ハ」字状に開き、端部は丸く納める	○ロクロ作り ○貼り付け高台	灰色 精良 良好
128	埴底部 灰陶	T 3 SD 7	底径 7.0	○上げ底を呈する。高台は断而逆三角形を呈する	○ロクロ作り ○貼り付け高台	灰色 精良 良好
129	広口壺 D	T 3 不明	口径 15.8	○口頸部は大きく外反して開く。端部は外端面を成す	○口縁外端面、刻み目 ○口縁部内外面共横ナデ ○頸部内外面共ハケ調整	暗黄褐色 小砂含有 良好
130	甕 A-11	T 3 不明	口径 9.8	○受口、口縁部は中位でふくらむ。端部はわずかにつまみ出す	○口頸部内外面共横ナデ	淡灰褐色 細砂含有 やや軟質
131	甕 A-8	T 3 不明	口径 15.0	○受口、口縁部は上外方へ開く。端部はつまみ出し凹面を成す	○口頸部内外面共横ナデ	淡茶色 小砂含有 良好
132	甕 A-17	T 3 不明	口径 13.7	○受口、口縁部は上外方へ開く。端部は尖り気味に納める	○外面頸部、櫛列 ○内面口頸部横ナデ	黄褐色 小砂含有 軟質
133	甕 A-1	T 3 不明	口径 15.2	○受口、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。端部は内面に肥厚する	○外面口縁部、櫛列 ○内面口頸部横ナデ	黄褐色 小砂含有 やや軟質
134	甕 D	T 4 SD 1	口径 29.1	○頸部は垂直にのび、口縁部は上外方へ開く。端部は丸く納める	○口頸部内外面共ハケリ	橙褐色 小砂含有 軟質
135	広口壺 A	T 4 SD 1	口径 13.0	○口縁部はなだらかなカーブをもって外反する。端部は外方へ肥厚する	○口縁部内外面共ハケ調整	暗乳白色 細砂含有 良好
136	細頸壺 B	T 4 SD 1	口径 5.7	○口縁部は短く、外反気味に立ち上がる。端部は丸く納める	○口縁部内外面共横ナデ ○外面頸部ハケ調整	淡褐色 細砂含有 良好
137	甕 B-2	T 4 SD 1	口径 8.4 腹径 10.1	○口縁部は「く」字状を呈し外反気味に開く。端部は丸く納める ○体部は長胴形を呈する	○口縁部内外面共横ナデ ○外面腹部ハケ調整	灰茶色 細砂含有 良好

図版番号	器形	出土地点	法量 または復元値 単位 (cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	色調土 胎土成
138	受口壺 A-1	T4 SD1	口径≒13.5	○受口、口縁部は垂直に立ち、端部は内傾する面を成す	○外面口縁部、櫛列 ○外面頸部ハケ調整 ○口頸部内外面共横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
139	受口壺 A-1	T4 SD1	口径≒13.4	○受口、口縁部は垂直気味に立ち、端部は内傾する面を成す	○外面口縁部、櫛列 ○内面口頸部横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 良好
140	受口壺 A-1	T4 SD1	口径≒14.4	○受口、口縁部は垂直気味に立ち、端部は内傾する面を成す	○外面口縁部、櫛列 ○内面口頸部横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 良好
141	受口壺 A-2	T4 SD1	口径≒13.4	○受口、口縁部は上外方へ開く。端部は水平な面を成す	○外面口縁部、篋列 ○内面口頸部横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
142	受口壺 A-2	T4 SD1	口径≒14.2	○受口、口縁部は上外方へ開く。端部やや内傾する面を成す	○口頸部内外面共横ナデ	淡褐色 細砂含有 軟質
143	甕 A-2	T4 SD1	口径≒13.0	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は内傾する面を成す	○外面口縁部、櫛列 ○内面口頸部横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
144	甕 A-2	T4 SD1	口径≒15.9	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部はつまみ出し、凹面を成す	○外面口頸部、櫛列 ○内面口頸部横ナデ	茶褐色 細砂含有 良好
145	甕 A-2	T4 SD1	口径≒13.9	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は内傾する面を成す	○外面口縁部、櫛列 ○外面頸部ハケ調整 ○口頸部内面横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
146	甕 A-2	T4 SD1	口径≒19.5	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は内傾する面を成す	○外面口縁部、櫛列 ○外面頸部、篋直 ○内面口頸部横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
147	甕 A-2	T4 SD1	口径≒15.2	○受口、口縁部はほぼ垂直に立つ。端部は内傾する面を成す	○外面口縁部、櫛列 ○外面肩部、櫛直 ○内面口頸部横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
148	甕 A-2	T4 SD1	口径≒16.1	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は内傾し肥厚し上方につまみ上げる	○外面口縁部、櫛列 ○外面頸部ハケ調整 ○内面口頸部横ナデ	茶褐色 細砂含有 軟質
149	甕 A-2	T4 SD1	口径≒15.6	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は外方につまみ出し水平な面を成す	○外面口縁部、櫛直、篋列 ○内面口頸部横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
150	甕 A-2	T4 SD1	口径≒15.9	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は外方につまみ出し、内傾する面を成す	○外面口縁部、櫛列 ○内面口頸部横ナデ	灰褐色 細砂含有 軟質
151	甕 A-3	T4 SD1	口径≒13.3	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は内傾する面を成す	○外面口縁部、櫛列 ○外面肩部ハケ調整後、櫛直 ○内面口頸部横ナデ	暗茶褐色 細砂含有 軟質
152	甕	T4	口径≒13.5	○受口、口縁部は垂直に立	○外面口縁部、櫛列	淡茶褐色

図版 番号	器形	出土 地点	法 量 量は復元値 単位 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 手 法 の 特 徴	色 調 胎土 土 焼
	A-3	SD1		つ。端部は内傾する面を成す	○内面口頸部横ナデ	細砂含有 軟質
153	甕 A-3	T4 SD1	口径 $\Phi$ 14.5	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は外方につまみ出し、内傾する面をもつ	○外面口縁部、楕円 ○内面口頸部横ナデ	灰褐色 細砂含有 良好
154	甕 A-3	T4 SD1	口径 $\Phi$ 15.4	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は水平な面を成す	○口縁部内外面共横ナデ ○頸部内外面共ハケ調整	淡茶褐色 細砂含有 軟質
155	甕 A-3	T4 SD1	口径 $\Phi$ 12.4	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は内傾にやや肥厚し、水平な面を成す	○口頸部内外面共横ナデ	茶褐色 細砂含有 軟質
156	甕 A-3	T4 SD1	口径 $\Phi$ 14.4	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は外方につまみ出し、水平な面を成す	○外面頸部、楕円 ○外面肩部ハケ調整後、楕直 ○内面口頸部横ナデ	茶褐色 細砂含有 良好
157	甕 A-3	T4 SD1	口径 $\Phi$ 13.7	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は内傾にやや肥厚し、水平な面を成す	○外面口縁部、楕直、楕円 ○内面口縁部横ナデ	淡黄褐色 細砂含有 軟質
158	甕 A-4	T4 SD1	口径 $\Phi$ 14.2	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は強くつまみ出し、内傾する面を成す	○外面口縁部、楕直 ○内面口縁部横ナデ ○頸部内外面共ハケ調整	黒褐色 細砂含有 軟質
159	甕 A-4	T4 SD1	口径 $\Phi$ 14.9	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部はつまみ出し、浅い段を成す	○外面肩部、楕波 ○口頸部内外面共横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
160	甕 A-4	T4 SD1	口径 $\Phi$ 19.4	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は強くつまみ出し、水平な面を成す	○口頸部内外面共横ナデ ○外面肩部ハケ調整	淡茶褐色 細砂含有 軟質
161	甕 A-4	T4 SD1	口径 $\Phi$ 10.8	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は内傾にやや肥厚し、内傾する面を成す	○口頸部内外面共横ナデ ○外面肩部、寛列、寛直	淡茶褐色 細砂含有 軟質
162	甕 A-6	T4 SD1	口径 $\Phi$ 18.4	○受口、口縁部は外方へ開く。端部は強くつまみ出し、内傾する面を成す	○外面口縁部、楕直 ○外面体部、楕直、楕波、楕直 ○内面頸部ハケ調整 ○内面体部、指圧後後寛削り	淡茶褐色 細砂含有 良好
163	甕 A-6	T4 SD1	口径 $\Phi$ 17.2	○受口、口縁部は外方へ開く。端部はつまみ出し、浅い段を成す	○口頸部内外面共横ナデ ○外面体部、楕直 ○内面体部指圧後ハケ調整	淡灰褐色 細砂含有 良好
164	甕 A-7	T4 SD1	口径 $\Phi$ 13.9	○受口、口縁部は外方へ開く。端部はつまみ出し、内傾する面を成す	○外面口縁部、楕直 ○内面口頸部横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
165	甕 A-7	T4 SD1	口径 $\Phi$ 12.2	○受口、口縁部は外方へ開く。端部は強くつまみ出	○口頸部内外面共横ナデ ○外面肩部指圧痕	灰褐色 細砂含有

図版 番号	器形	出土 地点	法 量 は復元値 単位 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 手 法 の 特 徴	色 調 胎 土 成 成
				し、水平な面を成す		軟質
166	甕 A-7	T4 SD1	口径φ13.4	○受口、口縁部は外方へ開く。端部はつまみ出し、水平な面を成す	○外面口縁部、横直 ○内面口頸部横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
167	甕 A-7	T4 SD1	口径φ16.1	○受口、口縁部は外方へ開く。端部はつまみ出し、水平な面を成す	○口頸部内外面共横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
168	甕 A-7	T4 SD1	口径φ12.8	○受口、口縁部は外方へ開く。端部はつまみ出し、水平な面を成す	○口頸部内外面共横ナデ ○肩部内外面共ハケ調整	淡茶褐色 細砂含有 軟質
169	甕 A-8	T4 SD1	口径φ15.6	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部はつまみ出し、水平な面を成す	○口縁部内外面共横ナデ ○頸部内外面共ハケ調整	淡茶褐色 細砂含有 軟質
170	甕 A-8	T4 SD1	口径φ11.9	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部は強くつまみ出し、水平な面を成す	○口縁部内外面共横ナデ ○外面肩部ハケ調整	淡茶褐色 細砂含有 軟質
171	甕 A-8	T4 SD1	口径φ15.8	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部はつまみ出し、浅い凹面を成す	○口縁部内外面共横ナデ ○外面頸部ハケ調整	茶褐色 細砂含有 軟質
172	甕 A-8	T4 SD1	口径φ15.3	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部はつまみ出し、水平な面を成す	○口頸部内外面共横ナデ	灰褐色 細砂含有 軟質
173	甕 A-8	T4 SD1	口径φ16.6	○受口、口縁部は垂直に立つ。端部はつまみ出し、浅い凹面を成す	○口縁部内外面共横ナデ ○外面頸部ハケ調整	淡茶褐色 細砂含有 軟質
174	甕 A-9	T4 SD1	口径φ14.3	○受口、口縁部は外方へ開く。端部はつまみ出し、外傾する面を成す	○口縁部内外面共横ナデ	暗黄褐色 細砂含有 良好
175	甕 A-9	T4 SD1	口径φ13.1	○受口、口縁部は外方へ開く。端部はつまみ出し、外傾する面を成す	○口頸部内外面共横ナデ ○外面肩部、横格	淡茶褐色 細砂含有 良好
176	甕 A-9	T4 SD1	口径φ14.7	○受口、口縁部は外方へ開く。端部はつまみ出し、外傾する面を成す	○口頸部内外面共横ナデ ○外面体部指圧痕後、横ナデ	淡茶褐色 細砂含有 軟質
177	甕 A-9	T4 SD1	口径φ12.3	○受口、口縁部は外方へ開く。端部はつまみ出し、外傾する面を成す	○口頸部内外面共横ナデ	淡黄褐色 細砂含有 やや軟質
178	甕 A-9	T4 SD1	口径φ 9.2	○受口、口縁部は外方へ開く。端部はつまみ出し、外傾する面を成す	○口頸部内外面共横ナデ	灰褐色 細砂含有 良好
179	甕 A-10	T4 SD1	口径φ19.3	○受口、口縁部は鈍い段を成し外反する。端部は内傾する面を成す	○口頸部内外面共横ナデ ○体部内外面共ハケ調整	暗褐色 細砂含有 やや軟質



図版 番号	器形	出土 地点	法 量 または復元値 単位 (cm)	形 態 の 特 徴	成 形 手 法 の 特 徴	色 調 胎土 焼 成
180	甕 A-11	T4 SD1	口径 $\Phi$ 13.8	○受口、口縁部は中位でふくらみ外方へ開く。端部は凹面を成す	○口縁部内外面共横ナデ ○頸部内外面共ハケ調整	淡灰褐色 細砂含有 良好
181	甕 A-12	T4 SD1	口径 $\Phi$ 10.3	○受口、口縁部は短く外方へ開く。端部は外傾する面を成す	○口縁部内外面共横ナデ ○外面肩部、寛格、柳直	淡褐色 細砂含有 良好
182	甕 A-13	T4 SD1	口径 $\Phi$ 17.0	○受口、口縁部は内弯気味に甘く立ち上がる。端部は丸く納める	○口縁部内外面共横ナデ ○外面肩部タタキ目 ○内面体部寛削り後ハケ調整	暗褐色 細砂含有 良好
183	広口壺 A	T4 SD1	口径 $\Phi$ 11.0	○口縁部は「く」字状を呈し直線的に開く	○口縁部内外面共ハケ調整	黄褐色 小砂含有 良好
184	甕 B-2	T4 SD1	口径 $\Phi$ 10.6	○口縁部は「く」字状を呈し外反気味に開く	○口頸部内外面及び外面体部ハケ調整	暗乳白色 小砂含有 良好
185	甕 A-2	T4 SD1	口径 $\Phi$ 15.3	○受口、口縁部は垂直に立ち上がる。端部は内傾する面を成す	○外面口縁部及び肩部、柳列 ○内面口縁部横ナデ ○内面体部ハケ調整	淡茶褐色 細砂含有 軟質
186	浅鉢 A-1	T4 SD1	口径 $\Phi$ 16.4	○受口、口縁部は短く垂直に立ち上がる。端部は丸く納める	○口頸部内外面共横ナデ	灰黒褐色 細砂含有 軟質
187	浅鉢 A-3	T4 SD1	口径 $\Phi$ 16.2 腹径 $\Phi$ 17.7	○受口、口縁部は内弯気味に立ち上がる。端部は丸く納める ○体部は圓球状を呈する	○口縁部内外面共横ナデ ○外面体部ハケ調整	褐色 細砂含有 軟質
188	高环脚 A	T4 SD1		○脚柱部はややふくらみ、裾部はなだらかに開く	○外面脚柱部ハケ調整	明褐色 細砂含有 軟質
189	高环脚 A	T4 SD1		○脚柱部はややふくらむ	○外面脚柱部ヘラミガキ ○内面脚柱部未調整	灰黄色 精良 良好
190	高环脚 A	T4 SD1		○脚柱部はややふくらみ、裾部はなだらかに開く	○外面脚柱部横ナデ ○透孔3ヶ所	暗褐色 密 良好
191	高环脚 A	T4 SD1		○脚柱部はややふくらみ、裾部はなだらかに開く	○外面脚柱部ヘラミガキ後柳直、柳列 ○内面脚柱部寛ナデ ○透孔4ヶ所	淡褐色 精良 良好
192	高环脚 B	T4 SD1		○脚柱部は「ハ」字状を呈し直線的に開く	○外面脚柱部ヘラミガキ ○透孔3ヶ所	淡褐色 密 良好
193	器台脚 A	T4 SD1		○脚柱部はなだらかに外反気味に開く	○外面脚柱部ヘラミガキ ○内面脚柱部ハケ調整	灰褐色 密

図版 番号	器形	出土 地点	法量 は復元値 単位 (cm)	形態の特 徴	成形手法の特 徴	色調土 焼成
					○透孔3ヶ所	良好
194	器合脚 A	T 4 SD 1		○脚柱部はなだらかに外反 気味に開く	○外面脚柱部横ナデ ○透孔3ヶ所	褐色 細砂含有 良好
195	器合脚 B	T 4 SD 1		○脚柱部は「ハ」字状を呈 し直線的に開く	○外面脚柱部横ナデ ○内面篋削り	灰褐色 細砂含有 軟質
196	器合脚 C	T 4 SD 1		○脚柱部は筒状を呈し、裾 部はなだらかに開く	○外面脚柱部横ナデ	灰褐色 細砂含有 良好



調査区T1～T3全景（東から）



調査区全景（北から）



T 1 遺構掘込状況 (西から)



T 1・SK 12 遺物出土状況



T2・SD2 遺物出土状況 (南から)



T2・SD2 遺物出土状況 (東から)



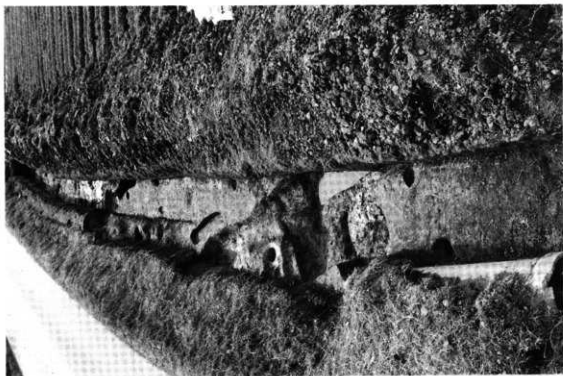
T2·SD2 壺露出狀況



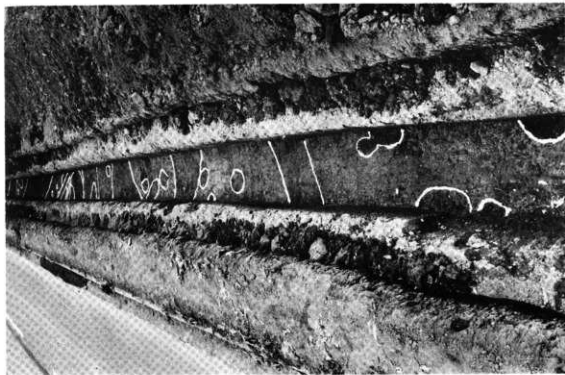
T5-B 遺構檢出狀況



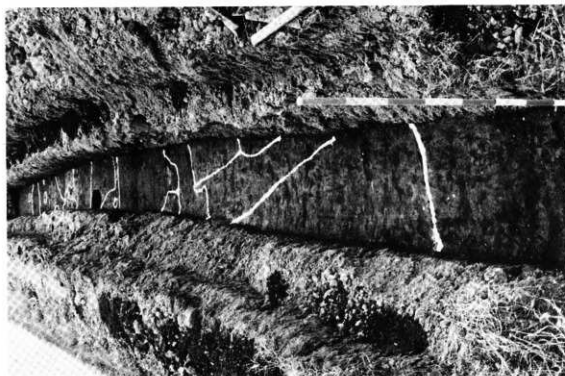
T2 遺構出土狀況



T4 遺構出土狀況



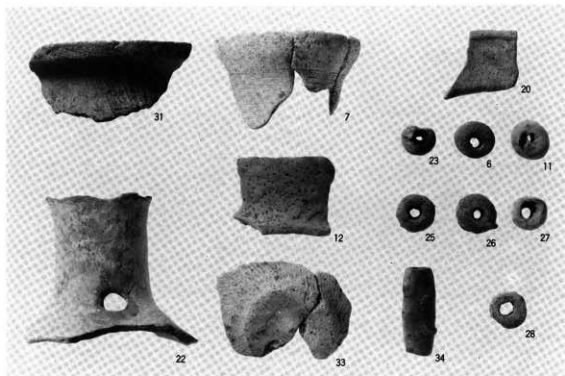
T5-B 遺構検出状況 (北から)



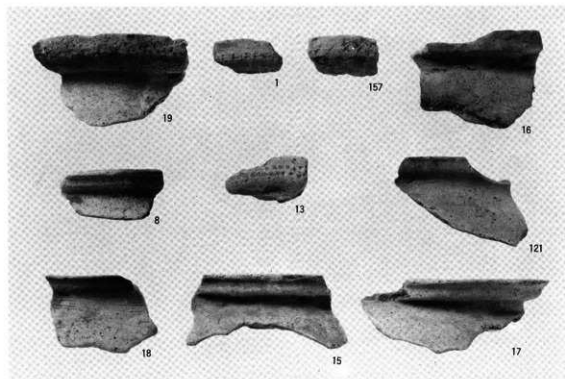
T5-C 遺構検出状況 (北から)



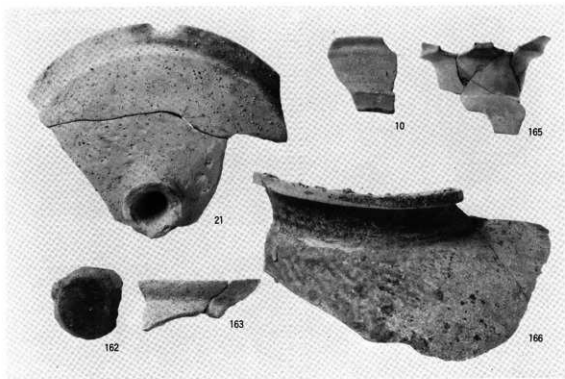




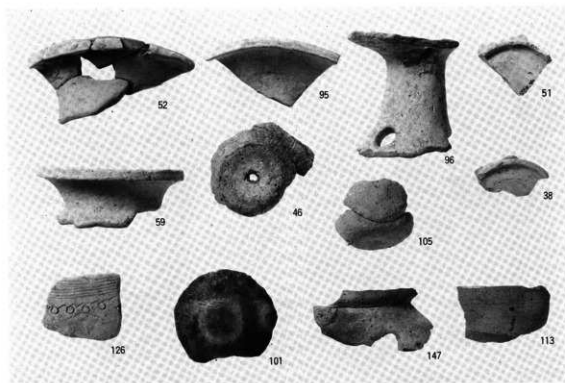
T 1 出土遺物



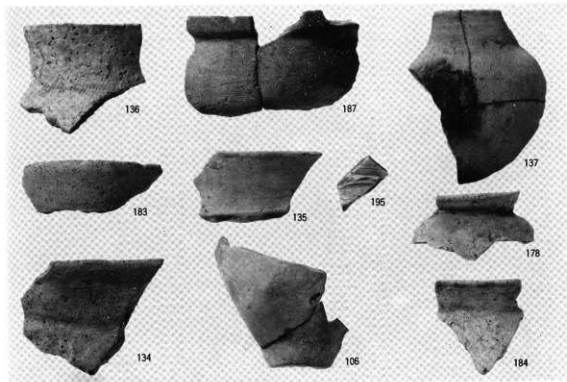
T 出土遺物



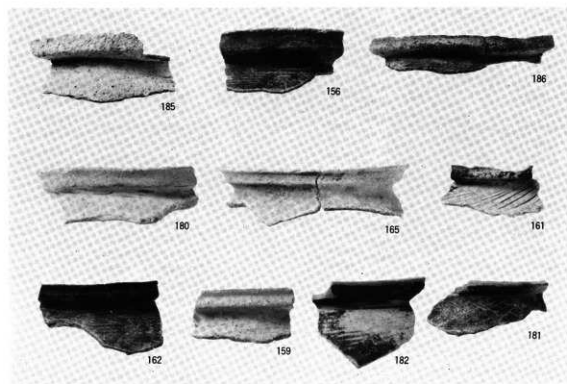
T 1 出土遺物



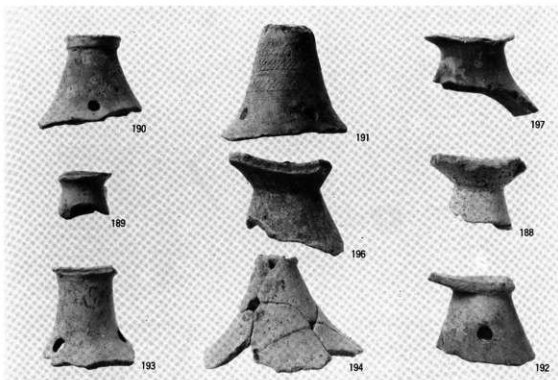
T 3 出土遺物



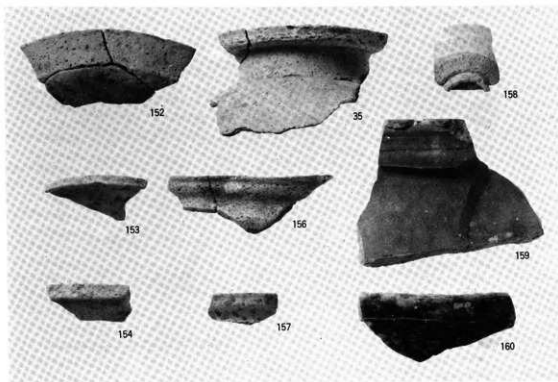
T 4 出土遺物



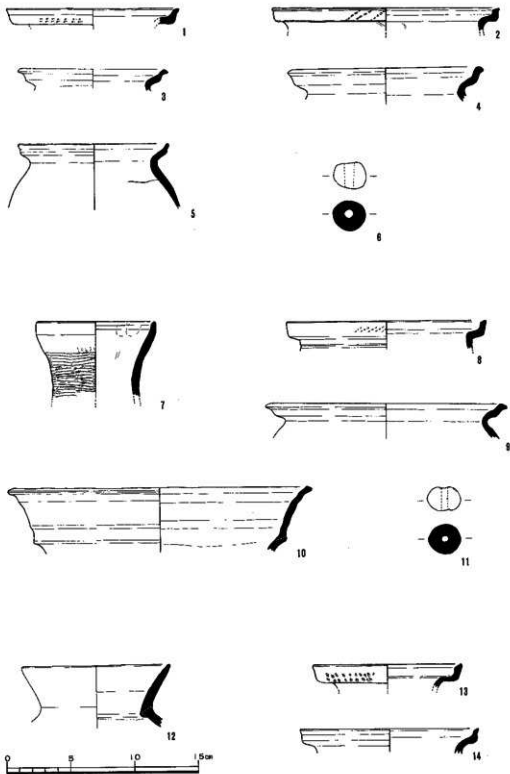
T 4 出土遺物



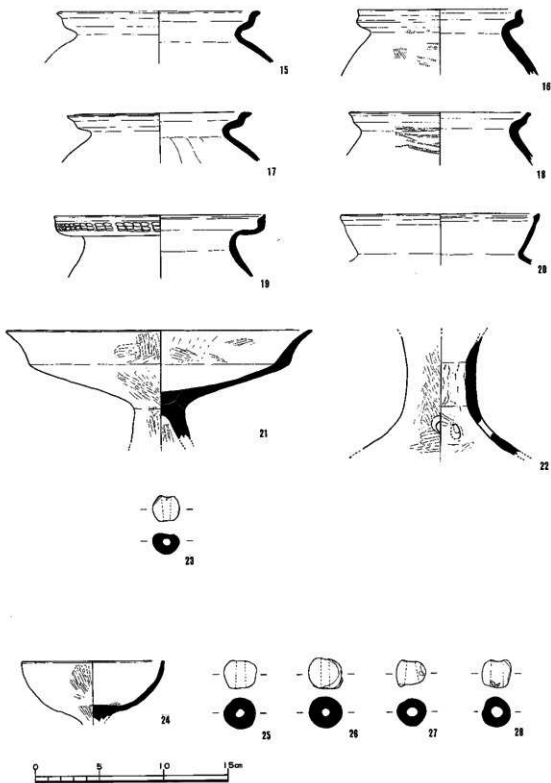
T 4 出土遺物



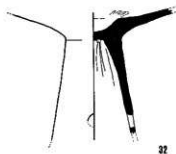
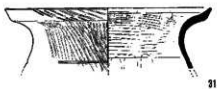
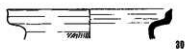
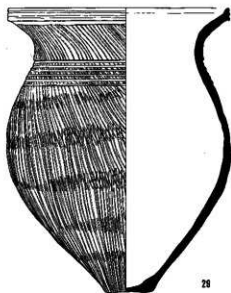
T 2 · T 5 出土遺物



1~6 (T1-SD1) 7~11 (T1-SD5) 12~14 (T1-SD6)

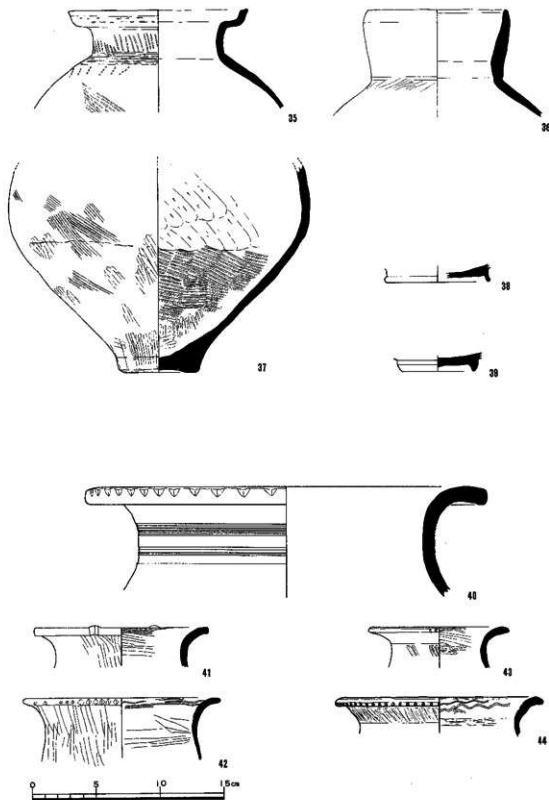


15~23 (T1-SD6) 24~28 (T1-SK9)

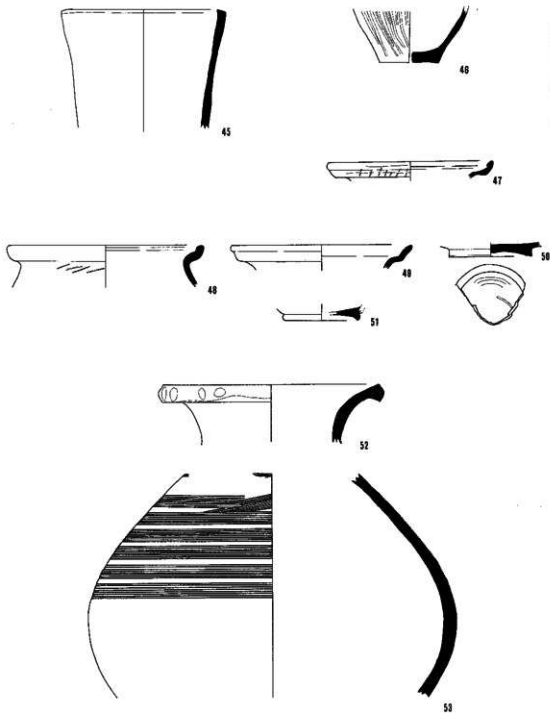


29 (T1-SK17) 30~34 (T1-不明)

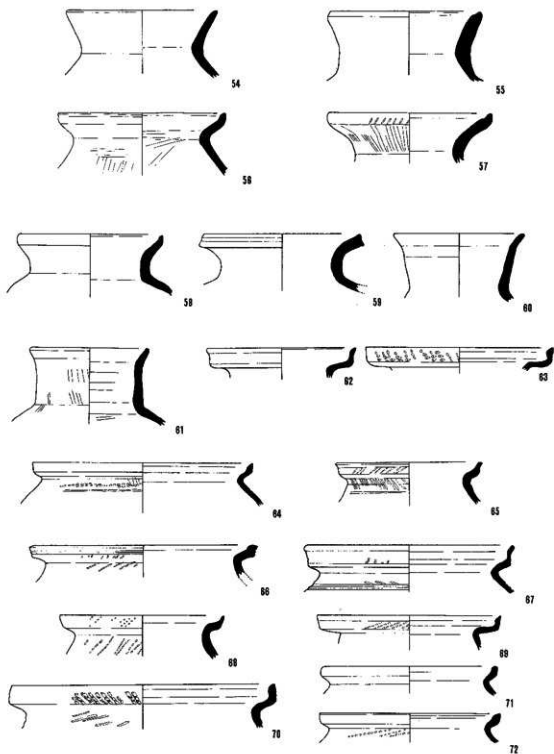




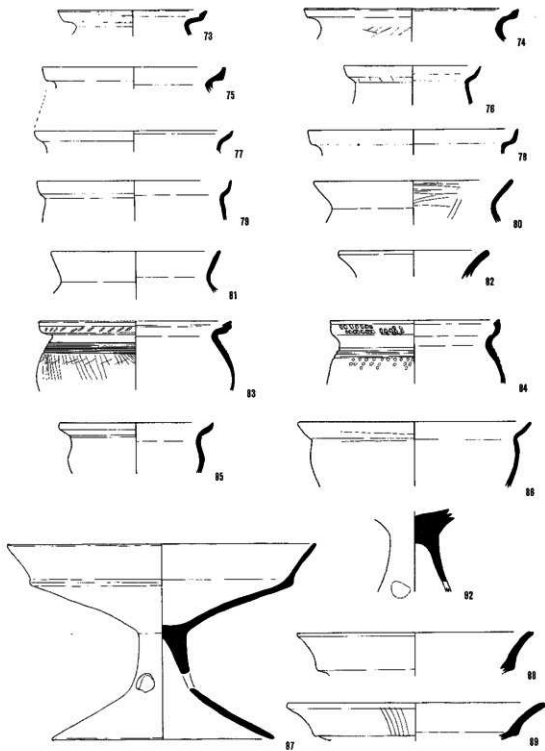
35～37 (T2-SD2) 38～39 (T3-ベース直上) 40～44 (T3-SD1)



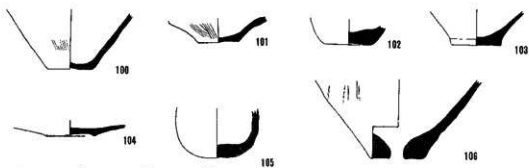
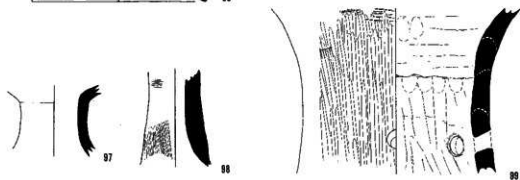
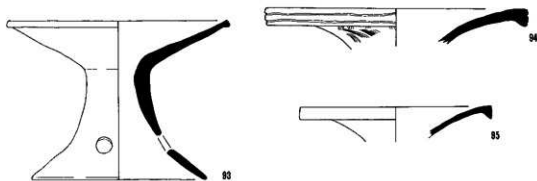
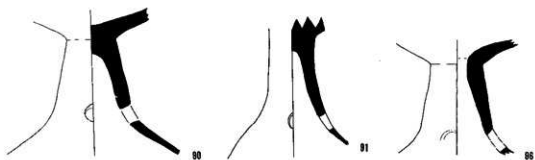
45~46 (T3-SD1) 47 (T3-SD2)  
48~51 (T3-SD3) 52~53 (T3-SD4)



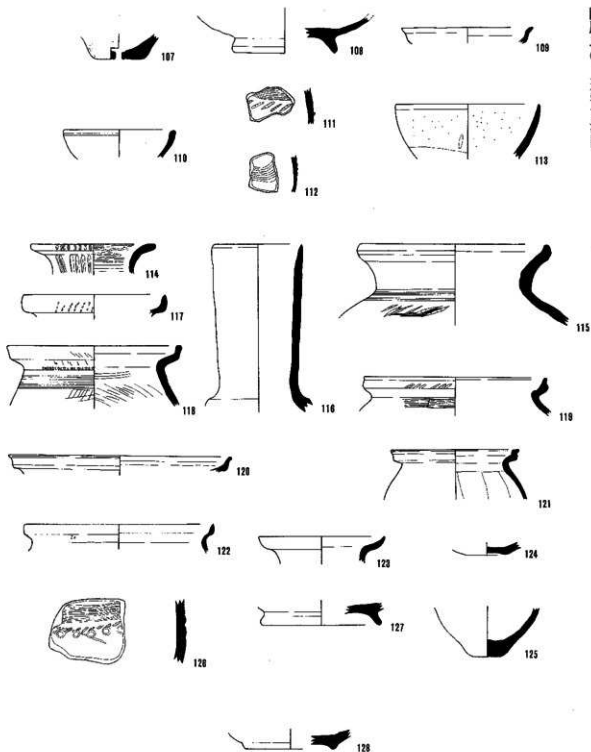
54~72 (T3-SD4)



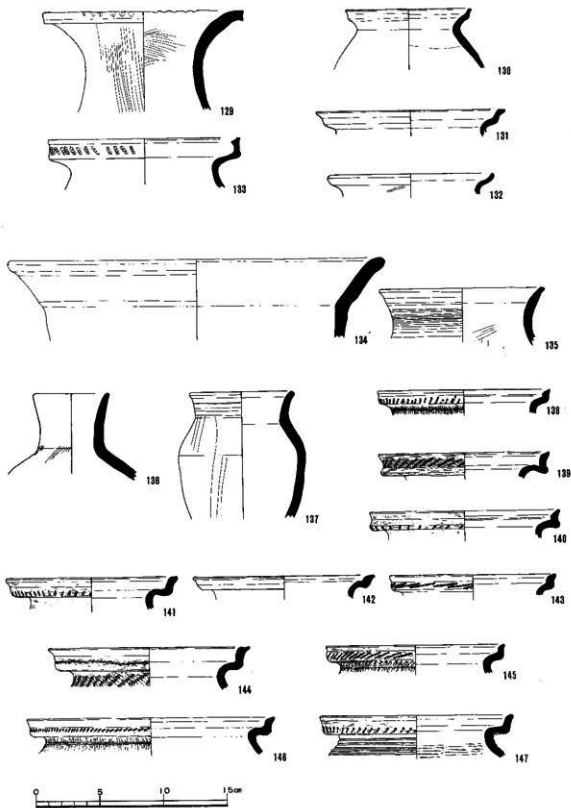
73~89、92 (T3-SD4)



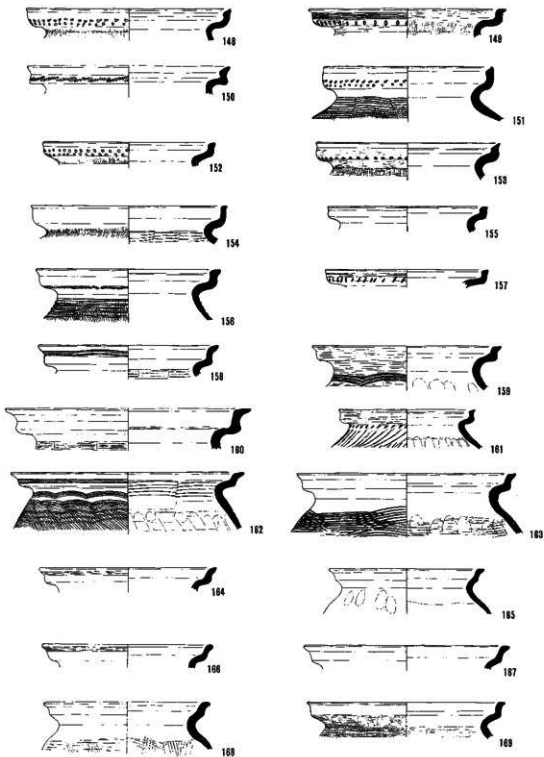
90、91、93～106 (T3-SD4)



107~113 (T3-SD4) 114~127 (T3-SD5) 128 (T3-SD7)



129~133 (T3-不明) 134~147 (T4-SD1)



148~169 (T4-SD1)





170



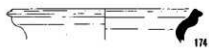
171



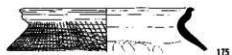
172



173



174



175



176



177



178



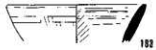
179



180



181



182



182



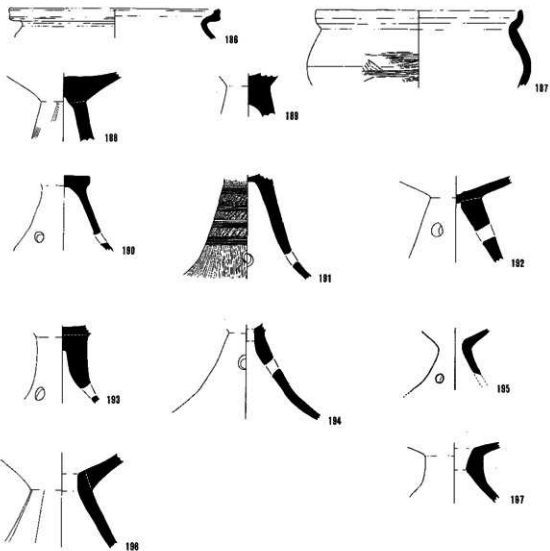
184



185



170~185 (T4-SD1)



186~197 (T4-SD1)

昭和61年3月

県営かんがい排水事業関連遺跡発掘  
調査報告書Ⅱ-1

編集・発行 滋賀県教育委員会文化財文化財  
保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121

内線 2536

財滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大宮町1732-2

電話 0775-48-9781

印刷所 富士出版印刷株式会社

大津市丸の辻4-20

電話 0775-23-2580